

「東日本大震災国際神学シンポジウム」と発表論文について

藤原 淳 賀（聖学院大学総合研究所教授）

東日本大震災国際神学シンポジウム実行委員会

この聖学院大学総合研究所紀要五四号は、東日本大震災国際神学シンポジウム「いかにしてもう一度立ち上がるか——これからの一〇〇年を見据えて」（二〇一二年三月二三日）で発表された論文を収めている。¹⁾

この国際神学シンポジウムが行われるに至った経緯を記しておきたい。

東日本大震災からまだ日も浅い二〇一一年四月、フルー神学校（Fuller Theological Seminary）では、学長委員会において、東日本大震災で被災した日本の教会に何らかの支援を行うということが決定された。具体的な支援の内容に関しては、日本人の在学生、卒業生に相談した上で決めるということになり、彼らを通して私のところにも相談があった。

当時は泥かき等の奉仕者も多く被災地で必要とされていた。学生のボランティアを送ってもらうことも考えた。しかしフルーは神学校である。教会に仕えるという姿勢を明確にしている神学校でなければできない貢献をしていたくべきだと考え、神学シンポジウムを行うことを提案した。それが受け入れられ、この国際シンポジウムに結実した。

大震災直後から様々な支援の働きが行われていた。人々は被災地のために献身的に動いた。キリスト教界の震災への反応も早かった。しかしそのような支援は時とともに減少していく。そしてキリスト教関係では、その後も被災地にずっと残っていくのは教会である。もちろんミッション・スクールやキリスト教諸団体もあるが、まず教会がしっかりと建て上げられなければならない。

私は、パーパス・ドリブン・フェローシップ・ジャパンという超教派の教会指導者のための働きやローザンヌ運動という福音派キリスト教の世界宣教の運動に関わっていたこともあり、震災直後から諸団体のネットワークや支援の働きに関わることができ、また多くの情報が入ってきていた。⁽²⁾ 諸教派、諸教団が今までの枠を越えて様々な支援を懸命に行ってきた。

われわれは、千年に一度といわれる規模の地震と津波を経験した。安全だといわれてきた原子力発電所が爆発した。これが特殊な「時」(καιρος^{カイロス})であることは多くの人が直感的に理解していた。この「カイロス(時)」を神学的に捉え、何よりも諸教会の助けとなるような国際神学シンポジウムを行わなければならないと考えた。

「いかにしてもう一度立ち上がるか」。大震災で激しく傷んだ日本と日本の諸教会がいかにしてもう一度立ち上がることができるのかを、またいかに立ち上がるべきかを、神学的に考察する必要があると考えた。さらにそれは被災地の教会への助けとなるだけでなく、被災地を含んだ日本の諸教会が、また諸教派が、神が今ここにおいてなさっておられることを見、その神の働きに参与することができるようなきつかけとなる会とすべきだと考えた。そしてそのことを通し、海外のの諸教会と協力し、神の国の前進となるような会とすべきだと考えた。神は既に働いておられる。だからわれわれは神の働きに応答しなければならない(H・リチャード・ニーバー)。神の贖いの働きに参与しなければならない(ティリッヒ)。そのように考えた。さらには、「カイロス」の感覚を研ぎ澄ませていく中で、日本のキリスト教のた

めに、また日本のために大きなビジョンの必要性を痛感した。小さく、被災地の教会堂の修理・移転への対応をするだけでなく、現状を見据え、今までの日本宣教全体を振り返り、これから一〇〇年後にどのような状況になっていたいと神に求めるのか、神はこれからの一〇〇年の日本のキリスト教会に何を願っておられるのかを求め、分かち合う時と場が必要であると考えた。

日本におけるキリスト教は決して大きくはない。いや日本のキリスト者は僅か人口の1%以下である。しかしその1%の中に日本のキリスト教は様々な壁を作ってきた。教派の壁、伝統の壁だけでなく、利害関係からくる壁、自分の好みから作った壁、つまらないプライドから作ってしまった壁もある。しかしこの大地震は地の基と共にこれらの壁をも揺り動かした。それらの壁を越えた協力が起こっていた。これはプロテスタント諸教会も、カトリック教会も経験したことである。さらに九九%の日本人から見れば自分たちは「キリスト教」あるいは「キリストさん」なのだということも、震災後の支援の中で教会は経験していた。しかしこのような壁を越えた働きは、明確な意志とストラテジーを持って支えていかなければと、時とともに消滅していく。この「カイロス（時）」を捉えなければならぬと考えた。学者たちが専門家のための議論をするのではなく、日本のキリスト教会のために、一般の人々が分かる言葉で、この大震災をどう捉え、神が何をしておられるのかを神の民として考察し、語らなければならぬ。さらに、主流派の教会と福音派の教会が協力しなければならない。

フラー神学校から正式に連絡が来たとき、何人かの人に相談した上で、私はこの企画を、実際の支援に広く関わっている東日本大震災救援キリスト者連絡会（DRcnet）に持って行った。また東京基督教大学（TCU）と聖学院大学総合研究所に持って行った。TCUと聖学院が、DRcnetと共に主催することで、福音派と主流派が肩を組んで大震災を経験した日本と日本のキリスト教のために共に前に進むというメッセージを発することができるからである。快諾してくださった、中台孝雄会長、榊原寛副会長をはじめとするDRcnet実務委員会、倉沢正則東京基督教大学学長、山口陽

一東京基督神学校校長、赤江弘之東京キリスト教学園理事長、大木英夫聖学院大学総合研究所長に心から感謝したい。また阿久戸光晴聖学院大学学長、小倉義明キリスト教センター所長がこの働きを支えてくださったことに深く感謝している。東日本大震災神学シンポジウム実行委員会として、中台孝雄先生、榑原寛先生、高橋和義 D.D.C. 事務局長、品川謙一日本福音同盟総主事、伊藤天雄東京基督教大学事務局長、山本俊明聖学院大学事務局長、そして私が仕上げさせていただいた。

神の民が集まる時、祈りと賛美をもって始まり、祈りと賛美をもって終わるのが適切である。オペラ歌手の稲垣俊也東京基督教大学講師が山内吏奈東京中央バプテスト教会音楽主事と共に賛美を担当してくださった。またフラ―神学校と日本との重要な橋渡しの役割を果たしてくださったのは、フラ―の教授たちが何度も会議の中で言及されていたように、フラ―の卒業生である一場茉莉子恵約宣教伝道所伝道師であった。

フラ―神学校は優れた宣教学の伝統を持つ神学校であり、現在世界で最も大きな神学校である。フラ―は、アメリカの神学校が被災国に出かけていき、何かを教えようとするというかたちにならないように、細心の注意を払っていた。シンポジウムの中心は、あくまでも日本の教会指導者であり、フラ―は日本の教会に伝え、励ますことを目的とするということを確認して来られた。教授を送り、できうる神学的貢献をし、献金を送り、手弁当で日本の教会に仕えるという姿勢で来られた。このことを明記し深く感謝を表したい。

フラ―神学校にはグレン・スタッセン教授を送ってくれるようお願いした。彼とは既知の間柄であり、彼がかつて放射線の研究をしていたこともあり福島の問題にも大変に敏感な社会倫理学者であることを知っていた。さらに彼の父ヘラルド・スタッセンはミネソタ州知事を務め、また国際連合の設立に深く関わった政治家である。大統領選にも何度も出馬している。第二次世界大戦直後の日本を見、復員した父からスタッセン教授は広島、長崎のことを含め戦争の悲惨さをよく聞いていた。スタッセン教授は神学的考察を常に実践と関係付けて考える。ユニオン神学校でラインホール

ド・ニーバーのもとで学び、かつ教派を超えた平和主義の実践を主張する、日本のキリスト教会が注目すべき倫理学者である。またフラーには、キリスト教史の中で大災害が起こった時、教会がどのように対処してきたのか、その歴史的考察をお願いした。ホアン・マルティネス教授がその労を取ってくださったことに感謝している。マルティネス教授は異文化国際プログラム学務担当副部長でもあり、フラーにおいて今回のような対外的な働きの中核の責任を担ってられる。スカイプで対話をし、今回の会の準備を共に進めてきた。フラーからはもう一人、メアリー・ギブン准副学長と一緒に来日された。山口陽一教授には、日本キリスト教史の観点からこの東日本大震災をいかに見るべきかという考察をお願いした。歴史家の鋭い視点をもつて、カトリック宣教によるキリシタン時代も含めた日本キリスト教史における東北について、またハリストス正教会にも深い注意を払いつつ、論じてくださった。そして東日本大震災を通して考えるべき問題を提示されている。重要なテーマでありながらあまり考察されてこなかったこれらの問題に山口教授は光を当ててくださった。大木英夫教授は、プロテスタント教会が一六世紀におけるその成立以来、様々な教派に分かれ続けてきたことの問題を深く認識しておられた。日本のキリスト教は、一九世紀の開国と共に始まった宣教直後は公会的性格を持っていたのだが、次第にそれを失っていった。この悲惨な大震災を通して日本のキリスト教がその分裂的性質を越えていく道を提示することができるならば、世界のキリスト教に対しての貢献となるということを震災直後から語っておられた。これらの講演以外にも、被災地現地から森谷正志先生（仙台バプテスト神学校校長）が支援の働きと宣教は大きく重なっているということを現地での働きの実感を込めて報告してくださった。

国際神学シンポジウムの予算は全くないところから始めた。しかしフラーが手弁当で来てくれるので、日本側の関係者にも皆、手弁当でお願いした。皆この意義を理解してくださり、快諾してくださった。知り合いの方々を中心に協賛（献金有）・後援（献金無）をお願いした。主催・共催を含めて、計二九団体がこの国際神学シンポジウムを支えてくだ

さった。個人的な献金を捧げてくださった方もおられる。心から感謝したい。

私たちが願ったことは、国際神学シンポジウムを行うことだけではなかった。神の国のために、日本のキリスト教のために、壁を越えた交わりが広がっていくことを願っていた。シンポジウムを機として今まで顔を合わすことがなかった諸団体のリーダーたちが繋がっていくことを願っていた。共に神の民として神の国の前進のためにできる協力を一緒にし、会議で同席するだけでなく、お茶を飲み、食事を共にし、ビジョンを分かち合うような関係が進むことを願っていた。

そのためにこのシンポジウムの直後に、主催・共催・協賛・後援団体の指導者たちで会食の時を持った。その後も定期的にそれらの団体の代表者会を持ち、ニーズや意見を聞きながら第二回東日本大震災国際神学シンポジウムの準備をしてきた。また「東日本大震災神学研究会『大震災を通して日本を神学する——Vision & Connection through Theological Investigations——』」を始めた。大震災という激しい裂け目を通して日本の問題と日本のキリスト教の問題を神学的に考察しつつ、それらを通して大きなビジョンと指導者たちの繋がりが生まれてきている。

フラー神学校が触媒となつて、少しずつ、かつて全く交わりのなかつた人々や団体が共に働きができるようになってきている。この震災後の日本において、これからも様々な協力関係が進められていくことを願っている。できる事は一緒にする。一緒にできなくても連絡が行き、顔が繋がりが、互いに敬意を払い、互いを建て上げる関係が発展していくことを願っている。

これからも様々な報告会やシンポジウムやディスカッションが行われていくであろう。私たちはこの国際シンポジウムに最善を尽くしている。第二回、第三回の準備も進めている。しかしこのシンポジウムよりもっと素晴らしく、そして暖かく、励ましとなるようなものがたくさん出てきて欲しい。それらの試みを心から支持したい。それらが壁を越え、神が何をなさろうとしておられるのか、という意識の中で進められていくことを心から願っている。その中でキリ

スト教会、キリスト教諸団体、神学校、ミッション・スクールの協力関係が進んでいくことを願っている。私たちが共に、神を愛し、この国において隣人を愛し仕える歩みを進めていくことができるように願っている。

あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もし互いの間に愛があるなら、それによつてあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。

(ヨハネ一三：三四―三五)

(肩書きはすべて東日本大震災国際神学シンポジウム当時)

注

- (1) この国際神学シンポジウムは二〇一二年三月二三日女子聖学院クローソン・ホールにて持たれた。
- (2) パーパス・ドリブン・フェローシップ・ジャパンでは震災直後の二〇一一年三月二日「災害支援キリスト者情報交換会 (Disaster Relief Christian Information Exchange)」を持った。二七団体から一三〇名の参加があった。またその後、同年四月一三―一六日、東京と名古屋において災害カウンセリング・セミナー「災害に襲われたときいかに人々に寄り添えるか (How you can help others when disaster strikes)」を米国サドルバック教会の協力で開催した(東日本大震災救援キリスト者連絡会 [DRChc] 後援、名古屋では東海福音フェローシップと名古屋キリスト教協議会との共催)。さらに同年六月二七―二九日(山形)、八月一七―一九日(福島)、八月二二―二四日(岩手)、三月二六―二八日(山形)に「東日本大震災で

被災された地域の牧師と家族のための被災した教会の牧会者セミナー」を行った。聖学院大学総合研究所の同僚、藤掛明先生の温かい協力があったことを記しておきたい。

東日本大震災国際神学プログラム

2012年3月23日 1:00-5:30 p.m.

総合司会 倉沢正則 (東京基督教大学学長)

- 1:00 開会の挨拶・祈禱 中台孝雄 (東日本大震災救援キリスト者連絡会会長)
- 1:10 会衆讃美「こひつじをば」 稲垣俊也 (東京基督教大学講師, オペラ歌手)
奏楽 山内史奈 (東京中央バプテスト教会音楽主事)
- 1:15 報告「限りなく狭間のない『支援と宣教』」
“Infinitely Close Relationship between Disaster Relief and Evangelism”
森谷正志 (仙台バプテスト神学校校長)
- 1:30 講演1「神の時を捉える:神のわざへの参与」
“Grasping the Time of God: Participating in His Work”
藤原淳賀 (聖学院大学総合研究所教授)
- 2:00 講演2「大災害時におけるキリスト教的応答:教会史から学ぶ」
“Christian Responses in Times of Disaster: Learning from Church History”
ホアン・フランシスコ・マルティネス Juan Francisco Martínez
(フラー神学校准教授)
- 2:30 講演3「日本キリスト教史における東北」
“The Tohoku District in the History of Japanese Christianity”
山口陽一 (東京基督神学校校長)
- 3:00 ディスカッション
- 3:20 休憩
- 3:40 独唱讃美「ホザンナ」(Jules Granier作曲 中田羽後訳詞)
稲垣俊也, 山内史奈
祈禱 倉沢正則
- 3:45 講演4「同情する苦しみ, また不正義との対決としての十字架」
“The Cross as Passionate Suffering and as Confrontation of Injustice”
グレン・ヘラルド・スタッセン Glen Herald Stassen (フラー神学校教授)
- 4:15 講演5「神に迫られた改革:日本を神学する」
“The Reformation Pressed upon Us by God: Thinking Theologically of Japan”
大木英夫 (聖学院大学総合研究所長)
- 4:45 ディスカッション
- 5:00 質疑応答・総合司会者コメント 倉沢正則
- 5:20 会衆讃美「キリスト教会の主よ」 稲垣俊也, 山内史奈
- 5:25 閉会の挨拶・祈禱 阿久戸光晴 (聖学院大学学長・理事長)
- 5:30-6:00 歓談
- 6:30-8:30 代表者による会食

大災害時におけるキリスト教的応答——教会史から学ぶ

ホアン・マルテイネス

豊川 慎・訳

神とはどなたであり、神はこの世でどのように働かれるのかという信仰告白の観点から、キリスト者は天災と人災に
応答します。私たちは非キリスト者の隣人となって彼らと同じ痛みと苦難に直面して時に神を疑うのですが、起こった
事柄を説明し、それに応答するために信仰を頼りにします。

三月一日の大震災は、神の摂理、被造物への罪の影響、そして神議論や苦難についての神学をどのように理解する
のかという問いを日本のキリスト者にもたらしたものと思います。これらすべてはキリスト者が考える必要がある重要
な問題であり、これらの事象についての私たちの解釈を形作ります。しかしこの講演ではこれらの問題に焦点を合わせ
ることは致しません。

キリスト者は教会史を通じて直面してきた大災害をある仕方で解釈してきたのですが、その解釈のいくつかを取り上
げ、そしてこれらの解釈が即自的にも長期的にもその応答にどのような影響を及ぼしたのかということについて今日は

考えたいと思います。教会史を通じてキリスト者の間の多様な共通の応答を考察し、いかにその経験が二〇一一年三月一日の出来事によつてもたらされた痛みと苦難に応答する日本のキリスト者の助けとなり得るのかということを考えたいと思います。

このため、私は歴史における三つのきわめて重大な大災害を手短かに概観し、それらの大災害を経験したキリスト者が、生起した事柄とその意味合いをどのように解釈したのかということを検討しましょう。それらの大災害の一つ一つは災害のただ中を生きたキリスト者に大いに影響を及ぼしましたし、神とこの世での神の御業に関する困難な問いを彼らにもたらしました。しかしこれらの経験はまた変容力のある (transformative) ものでした。それは、それらの経験が災害を経験したキリスト者が自らの信仰や神がどのように自分たちと共に歩んでおられるのかということの理解をどのように解釈したのかということの中に根本的な変化を生み出すという意味においてです。三月一日の大災害を解釈しようとする時、日本のキリスト者がそして皆さんと共に歩んでいる私たちがそこから何を学び得るのかを問うために私はこれらの経験を挙げたいと思います。

三つの「大」災害を概観していきましょう。それが起こった場においてキリスト者がその経験と解釈の明確な証しをそこに残した災害を概観しましょう。教会史の三つの相違する時期から各出来事を選びます。その一つは近年に起こった事柄を含みます。重大な大災害とはローマ陥落、ロンドン大火、そして近年ハイチで起こった大地震です。神の民が「これはどういう意味なのだろうか」と熟考してきた他の災害についても折に触れて言及します。これらの出来事それぞれはキリスト者が自身の信仰、神理解、牧会的応答、そして神がこの世でいかに働かれるかを解釈する思考の枠組みについて深く再考するに至らしめました。他の大災害と同様、これらの出来事はそのただ中に生きたキリスト者に大

大きな影響を与えました。外部の者や非キリスト者は何が起こったのかということに関して非常に異なった解釈をし、キリスト者と彼らの信仰を攻撃する根拠としてそれらの出来事をしばしば用いることもあるのですけれども。

信仰の民そして聖書の民として、歴史を通じてキリスト者は自身の経験を解釈するために聖書に訴えてきました。大災害時の間、キリスト者は何が起こったのかを理解する枠組みを与えるために聖書における大災害の経験に訴えてきました。特に、バビロン捕囚 (the Babylonian Exile) と嘆きの詩篇 (the psalms of lament) は何世代ものキリスト者に神は大災害のただ中でどのようにそしてどこにおられるのかということを理解するための解釈上のグリッドを与えてきました。

キリスト者が大災害に直面する時に生じる重要な神学的、宣教的、牧会的課題があります。キリスト者は痛みや苦難を経験する際に、必ずしも常に「キリスト教的に」(Christianly) 応答してきたというわけではありません。しかし時が進み、視野が広がるにつれ、キリスト者の解釈と応答は進展していく傾向があります。時の経過は必ずしも「より良い」応答をもたらすわけではありませんが、しかしキリスト者は「自分たち」の大災害についての視点と解釈を展開し続ける義務があるのです。時とともに重大な大災害はやがてキリスト者がこの世における神の御業を考えるための新たな機会、新たなパラダイムとなりました。

三つの出来事とキリスト者へのその影響を手短かに概観しましょう。その次に、多くの大災害に対する共通した応答と解釈のいくつかを示します。そして最後に、私たちは三月十一日の大災害の「意味を理解」(make sense) しようとしていますので、日本のキリスト者の助けとなり得るかもしれないいくつかの教訓をそこから引き出しましょう。

三つの出来事とキリスト者と教会へのその影響

四一〇年のローマ陥落は多くのキリスト者の間に信仰の危機を生み出しました。ローマ帝国のキリスト教化は多くの人々の間に神はローマ市とその居住者を守られるという感覚や、キリスト教がローマ帝国の公の信仰となったためにローマは特に祝福されているのだという感覚さえ生み出していました。ローマ陥落はそれ自体大災害でしたが、いくつかの事柄がその理解を困難なものにしました。まず第一に、侵略者たちもまたキリスト者であったということです。キリスト者は永遠の都の支配を求めてキリスト者と戦っていました。しかしそれを複雑なものにしているもう一つの問題は、多くの異教徒たちがローマはローマの神々を崇拜することを止めたがゆえに陥落したのだと断定したことです。この出来事は非常に深刻なものでしたので、アウグスティヌスにとって『神の国』(City of God)の中で神の統治の神学を展開することがその枠組みとなったのでした。

ロンドン大火は一六六六年九月二日に起こりました。三日後に大火が鎮火するまでに、ロンドンの八万人の居住者のうちのおよそ七万人の家々が焼失しました。この大災害に対するイングランド中からの応答は迅速かつ惜しみないものでした。教会を通して寄付金が集められ、説教者は多くの場合それを分け与える中心にいました。大火の主たる解釈者は牧師たちでした。これらの援助支援は多様なキリスト教のグループからもたらされましたが、大災害を通じて神はいかに働かれるのかということに関する共通の理解を多くの場合共有していました。その諸解釈は当時のイングランドで起こっていた深刻な宗教的、政治的、社会的変化を反映していました。その出来事は非常に重大なことでしたので、説

教者たちは一世紀以上の間、その出来事を隠喩および準拠点として用いたものでした。

私たちが準拠点として用いた最後の大災害は近年ハイチで起こった大地震です。二〇一〇年一月一二日の大地震はこの小さな国に大規模な影響を及ぼしました。少なくとも、三〇万人が亡くなり、一〇〇万人が家々を失い、そして少なくとも三〇〇万人がその被害の影響を直接受けました。世界中からキリスト者は即座の必要性に応答しました。ハイチの信仰者はともに苦しむ他の人々とともに「なぜ」と問わざるを得ませんでした。インフラの不十分な貧しい国がなぜわずかな財産を破壊する地震の打撃を受けるのか。確かに、大地震をハイチの人々のブドゥー教の慣行ゆえの神の裁きと解釈したパット・ロバートソンのようなキリスト者もいました。ハイチ大地震はまだ最近のことですので、ハイチのキリスト者がどのように大地震を長期にわたって解釈するのかは未だ明らかではありません。

解釈上の応答

一連の応答には共通した傾向を見ることができます。最初に、必要としている人への迅速な応答があります。その最初の応答の後にキリスト者は解釈上の問いを問い始めます。なぜこのことが起こったのか、これはどのような意味なのか？ 神はどこにおられたのか？ なぜ神はこれらの事柄が起こるのをお許しになられたのか？ 大災害が非常に深刻なものであるならば、それはキリスト者共同体の解釈上の用語の一部となるのです。

〈キリスト者の応答の要請としての大災害〉

大災害に対するキリスト者の最初のそして最も共通する応答は困っている人々を助けることです。キリスト教の歴史を通じて、キリスト者は苦しんでいる人々に助けの手を差し伸べた最初の人々に含まれます。キリスト教信仰の重要な表出の一つは常に具体的な行動を通じてイエス・キリストにおける神の愛を示すことです。

ローマが陥落したのは戦いのゆえでしたから、その状況は自然災害とはいささか異なっています。しかしアウグスティヌスは、キリスト者の侵略者たちは戦いから逃走する人々やキリスト教会内への避難を求める人々に対して人道的に振る舞ったということを強調しています。つまり、戦争のただ中でさえ、キリスト者は苦しんでいる人々に対して慈愛をもって応答したのです。

ロンドン大火の直後になされた説教の一つで、デビッド・ストークス牧師は、その出来事は「あなたがたいなる慈善の思いを心の内に認めるかどうかを見るに非常に大きな出来事たる猛火の痕跡」であったと述べました。ヤコブ・フィールドはロンドン大火に関する自身の研究の中で、イングランド中の教会は被害の程を知った時、大変惜しみなく応答した⁽¹⁾ということを明らかにしています。

ハイチ大地震に対するキリスト者の応答についても同じことを言うことができます。すべての大きなキリスト教援助団体やあまり知られてはいない多くの団体、そして教会がハイチに膨大な総額のお金や他の援助を送ることによって必

要としている人々に応答しました。多くのキリスト教団体がハイチにあり、それらの団体は継続的に人々を助け、大震災からの復興を継続して行っています。

迅速な行動と応答の要請は教会への要請にもなります。大災害は、キリスト者が神に近づく必要があるということを経験する時、つねに「試金石」の時となりました。説教者はこれらの時を信仰者のリバイバルのために、そして大災害の中に反映される生の暫定性の観点から神との関係を熟考する時としてしばしば用いるのです。

ロンドン大火の直後になされた説教の多くは「屈伏と断食」を求めました。これらの説教は人々の心に触れましたので、しばしば教会は人々があふれるほどいっぱいでした。⁽²⁾ すべての説教者がこの世界を慎理的に考察し、全ての事柄の中に生ける神の御手を見ました。こうして、圧倒的多数の人々が、罪深き世界におけるいかなる大惨事も人間の罪に対する神の怒りの象徴と見なされるだろうと結論づけました。⁽³⁾

これと同様の精神が大震災後のハイチにおける教会礼拝の多くの中で見られました。死と破壊は神を思い起こし、神を探し求める時を示しているのだと。

〈裁きとしての大震災〉

先の点と関連しますが、大震災を神の裁きや罰とする共通した解釈があります。先に述べたように、ローマ陥落はキリスト者からだけではなくいくつかの視点から裁きと受け取られました。

ロンドン大火は明らかに神の裁きと理解されました。火災は裁きと罰の隠喩となりました。火災は純化し清め得るものですが、それは明らかに神の裁きと同一視されました。ロンドン大火を時の終わりの徴と見なす人々もいました。この大火を裁きと語る説教は人々が悔い改め、神を求めることに関心がありました。

ハイチの大地震もまた神の裁きと解釈されてきました。この点に関して最もよく知られている発言の一つは、ハイチ大地震はハイチの人々が長年にわたってブドゥー教を信奉してきたために起こったのだというパット・ロバートソンによる分析です。

大震災を裁きと考えることに伴って常にある厄介な問題の一つは、神の裁きが「他者」に対するものであることを当然視する傾向にあることです。この視点においては神の裁きは全く「私たち」に関するものではなく、「彼ら」に関するものとなっています。私たちは苦しみにあるかもしれないけれども、それは彼らがしてきたことに対するまさに神の罰であり、そして多分、「彼らを」「彼らの」罪の中にあり続けることを私たちがそのままにしてしまっていることに對する私たちへの罰なのだ。ロンドン大火の後、裁きの理由が、王の罪、カトリック教会の罪、国教会（アングリカン・チャーチ）の罪、あるいは他の政治的、宗教的勢力の罪にあると考えた多くの説教者がいました。このような解釈がエイズの蔓延、九月一日の出来事、そしてハイチ大地震を説明するために用いられました。いずれの場合にも、「私たち」の罪とは、それが少しでもあるとすれば、彼らに悔い改めを求めることなく、社会の放蕩な姿勢によつて他者の罪を「そのまま放置していること」なのだ。

このような視点はまた私たちがどのように神を理解するのか、どのように神が人間の生活に関わっておられるのかという問いをもたらします。大災害は、神の定められた計画の一部分なのか、あるいは人間の罪性の結果なのだろうか？神は大災害を用いられるのか、あるいは大災害を修復するのだろうか？

〈混乱としての大災害〉

聖書記録の至る所で見られる大災害やキリスト教の歴史における大災害によってもたらされた応答の一つは混乱でした。大災害は人どのように神を理解し、どのようにこの世における神の働きを理解するのかという難解な問いをもたらしました。旧約聖書において、捕囚はその問いを絶えず抱えています。このただ中において神はどこにおられるのか？なぜ神は私たちにこのようなことが起こることをお許しになるのか？多くのキリスト者の感覚では神は「私たちの側」におられることを前提としているので、もし大災害がその民に降りかかるならば、神は民を配慮なさらず、多分に神は実在しないのかと問うのでした。

これらの問いは大災害がキリスト者——共同体と個人の両方——に襲いかかった時に様々な形で繰り返し返されました。このような状況は多くの人々に信仰の危機を引き起こしました。この主題に関しての多くのバリエーションがあり、私たちの大災害のそれぞれに関連しています。キリスト者は神に泣いて求めますが、応答がないように思えます。神は沈黙あるいはおられないかのように思われ、すべての希望が失われて見える場合があります。

歴史は、ヨーロッパに黒死病が蔓延した間（一三四八—一三五〇年）に多くの人々が信仰を失ったということ私た

ちに伝えています。人々は祈り、教会の中に避難を求めましたが、いずれにしても多くの者が亡くなりました。生き残った人々の多くは放縦なパーティーに身を任せ、虚無的な人生観を展開しました。二つの世界大戦後の西ヨーロッパの人々の間にも同じような応答が見られました。

しかし、混乱はまた深遠な応答を呼び求めました。嘆きの詩篇やそれと類似の文献は大災害や苦悩や混乱状態のただ中で生み出されました。バビロン捕囚期の預言者の説教、『神の国』、ジョン・ダンの詩、カール・バルトの神学、そしてデイートリッヒ・ボンヘッフアーの著作はすべて大災害と破壊という混乱状態に対する深遠な応答例です。

「神はどこにおられるのか」という問いは諸々の大災害の後にキリスト者が問うた問いでした。その痛みは混乱と同じくらい深刻なものでした。時に同意しかねる神学が争点でしたが、ほとんどの場合に問題は神は痛みと苦しみからほど遠いように思われるということの意味でした。

もちろん、大災害は信仰者ではない人々がキリスト者に疑問を投げかけ、非難する機会にもなりました。アウグスティヌスはキリスト教をローマ陥落の問題と見なした異教徒たちの非難からキリスト教を擁護することに『神の国』の第一部を費やしています。そしてインターネットを少し探索してみると、ハイチ大地震を踏まえれば神は存在しないか、罪深いかどうかであると主張する多くの記述を見つけることができます。

〈新しきものへの開示としての大災害〉

大災害に関連する解釈の一つは長期的に見ることによってのみ解釈することができるというものです。この歴史的な解釈は大災害から生じた肯定的な結果に焦点を合わせます。神は新たな現実を創出するためにこの状況を通じて働かれるのであり、それは通常、社会内のリバイバルや刷新の形で見出されます。ヨーロッパにおける黒死病は前宗教改革の説教者たちや封建主義の終焉の背景となりました。ロンドン大火は新しいロンドンとイングランドにおける宗教的变化に道を開きました。

重要な視点は神は大災害のただ中において働いておられるという信念です。しかしその概念は神が長期にわたって良きものをもたらすために大災害を用いているということです。リバイバルはしばしば苦難の時代の後に続いて起こりました。しかし明らかに、先に見たような信念——つまり私たちが大災害の直後の時期に神の働きを見出すのは、私たちがそれを期待しているためであるという信念——に基づき解釈です。

〈神学的パラダイム転換としての大災害〉

旧約の民にとつて、神の民であるとはどういうことなのかを理解しようと求めた時、バビロン捕囚はその問い直しの重要な契機、つまりパラダイム転換の役割を果たしました。出エジプトが自分たちのアイデンティティーを明確にし、試金石としての経験になったとともに、バビロン捕囚もまたユダヤ人が神と世界における神の働きをどのように理解す

るのかということに際して結局はキーポイントとなったのです。彼らは神が全ての民の神であり、神はエルサレムに限定されはしないということを学ばなければなりませんでした。

数々の重大災害はこれらの出来事とその長期的影響に気を配るキリスト者に神学の再考を促してきました。ローマ陥落はキリスト者に場の神学や人による統治と神の統治の関連性を再定義させました。『神の国』はキリスト教化された国家の中の多くのキリスト者が同型の大災害に直面しなければ忘れがちな神学を私たちに提示しています。

ロンドン大火はロンドンのキリスト者にもイングランドの全ての人にとつても同様の目的を果たしました。大火は神がイングランドにおいてどのように働いておられたかということを知り、解釈するための隠喩であり、徴であり、解釈学上の手段となりました。説教者たちは神が自分たちにどのように語っておられるのかを理解しようとする時、一世紀以上にわたつてその大火に言及し続けたものでした。大火は浄化と裁きの隠喩の役割を果たすため、神は人間生活の中でどのように働かれるのか、そして大火がロンドン大災害においてどのように浄化と裁きの両方の役割を果たしたのかということの重要例となったのです。

このような考えは長期的に最も効果的に起こります。人はこの二〇〇年間に起こつた他の重大災害を挙げ、キリスト者はいかにそれらを重要な変化点と考えることができるのか、つまり神が教会と社会に再び焦点を合わせるために大災害のただ中で働いておられるのかもしれないその時として大災害をどのように考えることができるのかということです。黒死病、コンスタンティノーブルの陥落、そして世界大戦はその衝撃を経験した人々に同じようなパラダイム転換を引き起こしました。

ハイチのキリスト者が大地震の経験をどのように解釈するのを見るには今はまだ早すぎます。大地震は人口の大部分の人々に影響を与えたので、長期にわたってその環境における神学思想に影響を及ぼしそうです。このことはまた日本の皆さんにとっても重要な問いでしょう。物質的ダメージは特定の地域に限定されますが、日本人の精神へのダメージは深刻でした。日本のキリスト者、そして日本人一般は長年の間、この出来事を振り返り、神についての考え、世界をどのように理解するののかということに大震災がどれほどの変化をもたらしたのかを見ることでしよう。

諸種の応答から学ぶこと

これらの応答や解釈のすべては過程の一環に他ならないという意見があります。私たちの神学的諸構想はある人にとっては取り組むのにより容易あるいはより困難なものかもしれませんが、それらすべては同じ次元で関わつてきます。キリスト者としても私たちが、神は世界の中で働かれ、神は人間の状態に配慮されるのだという視点から始めるならば、神はいかに私たちの生活において大きな影響を引き起こす、かの出来事の一部なのかと問わなければなりません。その各々が、働かれる神を私たちがどのように理解するののかというこの告白です。バビロン捕囚の預言者たちが流浪の災難という痛みに向かうとともに、民はこの世での神の働きに関する新たな思考のあり方を学んだ時に成長したのでした。

大災害の時に迅速に応答することは神が私たちを通じて働いておられるということをし、つまり私たちはこの世におけ

る神の手足であるということを告白することです。もしキリスト者が必要性が生じた時に他者に対して助けの手を差し伸べないならば、イエス・キリストの弟子として歩む私たちの信仰とコミットメントを否定することになるでしょう。他者の必要性に応答することは必ずしも人間の応答というわけではなく、特に他者が私たちの「敵」あるいは部外者である時にはそうであるということをお私たちは認めます。初代教会は明らかに必要を求める者を助ける重要性を理解していましたし、キリスト教の最初の数世紀の時代を通じて、非キリスト者たちはキリスト者たちの献身と奉仕を証言しています。キリスト者が特定の国や政府とあまりにも同一視されるようになる時に問題が生じ始め、「敵」を助けることが困難であることに気づくのです。

その上、私たちの人間状態もまた人生の複雑な経験に関する難しい問いを問うことを強めます。聖書を通じて私たちは信仰者たちが決して抱くはずはないと思っていた問いを問うことを大災害が余儀なくさせる時に、彼らが信仰と人生に関する深刻な疑念をもっていたのを見ます。

各災害とそれに続く解釈が私たちに求めていることは、神がこの世で働かれると告白することは何を意味しているのかということの特定の局面を考えることです。私たちは神が主権者であられ、人間はちに過ぎないと告白するのですが、しかし神が苦難と大災害の結果から私たちを救ってくださいることを私たちが欲するとともに、大災害はもう一つの事柄を認識することを私たちに強めます。働かれる神を私たちはどこに見るのか、そして神が働かれておられるということをおどのように知るのだろうかという問いです。

キリスト者としての私たちの課題の一つは、神とはどなたであり、神はどのようにこの世界でそして人間との関わり

の中で働いておられるのかということ、神学し理解しようとする事です。大災害が襲う時、私たちはこの課題を避けることはできません。色々な意味で、私たちが信仰の強さと弱さに直面するのは、つまり信仰を磨き明確にする試練に直面するのは生と死の端においてです。しかし、神が教会を通じて、そしてこの世の中で働き続けておられるということとを告白できる場所もまたあります。パラダイム転換を迫る出来事は疑いへと導き得るものですが、それはまた神を理解する新たなそして深遠な仕方にも導き得るものなのです。

忠実な教会として応答すること

日本社会はいまだ三月一日の大震災の意味を理解しようとしています。多くの日本人はいかにして海を「飼いなす」か、いかにしてエネルギーの必要に備えるのか、いかにして自分たち自身をそして大都市圏外に住む人々さえも引き受けるか自分たちは理解しているのだと確信していました。三月一日は私たち人間は小さな存在に過ぎず、どんな人間社会も自然をコントロールすることはできないということ、そして他者の必要性を忘れがちであるということ、明らかにしました。

日本のキリスト者は日本社会全体の一部ですから、日本のキリスト者もまたこれらの問いに直面しています。しかし、キリスト教信仰ゆえに、そしてキリスト者は人口のごくわずかな割合のゆえに、これらの問題の端にいて感じていくかもしれません。大災害の意味する事柄から離れようとする誘惑もまたあります。なぜならそのことは「彼ら」の問題であり、キリストの再臨を待っている人々の問題ではないからだ。

しかし、私たちがこの地上にいる限り、まるで私たちがその物語の一部ではないかのように、つまりその問題が「彼らの問題」であって「私たちの問題」ではないかのように行動することはできません。それが他のキリスト者たちが他の大災害の中で取り組んだ難解な問いの反復が日本の教会にとってなぜ重要なのかということの理由です。

大震災のキリスト教共同体への影響はそれが三つの側面を含むとき最も変容力あるものとなります。第一に、キリストの名において、必要としている人々への迅速な応答と最も傷ついている人々に仕える意欲があることです。（大震災に迅速に応答したいくつかの日本のキリスト教団体や海外のキリスト教援助団体の名前をこのシンポジウムに見ることができます）。第二に、大災害がキリスト者にとって神との関係やイエス・キリストに従うことへのコミットメントの明確さを反省する機会となるとき、リバイバルと成長があるということです。時間の経過とともに、この過程はまた三つ目の重要な側面である再解釈へ、そしてしばしばパラダイム転換へと至ります。聖霊の力において、決定的な時を読み返すことはキリスト教共同体に成長と成熟をもたらします。それはまた宣教についてのそしてこの世における神の働きにおける自らの役割についての新たな意味を与えるのです。時が経つにつれ、神が新しい現実に向かって特別な大災害を通じて働かれるあり方をキリスト者は見極めることができるようになるのです。

三月一日は日本のキリスト者を差し迫った状況に応答することへと結果させました。歴史的そして神学的相違ゆえに共通点を特定することが難しいと考えてきた諸教会を結びつけました。皆さんは今、熟考のただ中に置かれています。この熟考が日本の諸教会に刷新とリバイバルをもたらすために用いられますように。そして三月一日が日本社会にとってパラダイム転換の兆しを示し始める時、それは日本のキリスト者が新たな仕方で見つめ、日本社会

における役割を再考し、神が日本社会においてどのように働き続けておられるのかを見るための神によって用いられる手段となるのです。皆さんとともに歩みますが遠くから見守る私たちは皆さん方から学ぶことを切望しています。なぜなら神よ、なぜと問うことは明日は私たちの番かもしれないからです。

注

- (1) Jacob F. Field, "Reactions and responses to the Great Fire: London and England in the later seventeenth century." *School of Historical Studies*, Newcastle University を参照。この研究は二〇〇八年七月にニューカッスル大学の博士論文として提出されたものである。デビット・ストークスの引用は二五六頁からのものである。
- (2) 引用は次のものによる。"Fire of London" http://en.wikipedia.org/wiki/Great_Fire_of_London. March 6, 2012.
- (3) Field, *op. cit.*, p.345.

同情する苦しみ、また不正義との対決としての十字架

グレン・スタッセン

河野 克也・訳

福島第一原子力発電所周辺地域の方々は、多大な苦しみを経験した。そして、その苦しみは今なお続いている。私たちも皆、その方々とともに、その苦しみを経験している。私たちはまた、回復のために祈る。ホアン・マルティネスと私が来たのも、まさに私たちの同情 (compassion) を表明し、また絆 (connection) を結ぶためである。

私たちの福音は、私たちのために多大な苦しみを引き受けてくださったイエス・キリストについての福音である。そこで私は、福島の方々を念頭に置きながら、マルコ福音書が語っていることに注目することで、イエス・キリストの苦しみについてさらに深く学ぶことができるのではないかと、問いかけてみたい。⁽¹⁾

十字架上のイエスの苦しみの意味については、もちろん過去二〇世紀の間に多くの解釈がなされてきた。しかしそれらの解釈は、諸福音書そのものからではなく別のところから持ってきたメタファーを使っているという理由で、批判されている。⁽²⁾ マルコ福音書が十字架を解釈するその解釈に、注意深く耳を傾けていただきたい。同様に、北森嘉蔵は『神の痛みの神学』において、エレミヤ書三一・二〇とイザヤ書六二・一五に注意深く耳を傾けた。私は彼の解釈を大いに尊敬しており、この六五年前の日本の解釈から残りの世界が学ぶべきことについて、賛辞を呈したいと思う。北森がエ

レミヤ書に焦点を合わせたように、私はマルコ福音書に焦点を合わせることにしよう。そうすることで私たちは、福音第一原笈のメルトダウンと放射能汚染に苦しんでいる方々を支援しようとするこの時に、私たち自身の神学を深めることができるかと期待するからである。

マルコ福音書——同情と対決をもつて存在に介入すること

「神の子」と聖霊の働きとは、マルコ福音書全体を通して、イエスがだれであるかを理解する鍵となつて⁽³⁾いる。マルコ福音書は、その最初の節から、イエスについて受肉論的に語り、イエスが神の子であり、イエスにおいてまたイエスを通して聖霊が行動していると告げる。「神の子イエス・キリストの福音」であり、このお方の上に聖霊が鳩のように降り、このお方について天からの声が「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と宣言する（マルコ一・一〇一—一一）。

イエスがなさることにおいて、私たちは神が行動しておられるのを見る。イエス・キリストにおいて神は現臨し、私たちの生のただ中に受肉論的に介入して、私たちの疎外や不正義、敵意を、神御自身の中に引き受けてくださる。マルコ福音書において、神は苦しみのただ中に同情的に入ってください、同様に恥と罪責の経験の中にも入ってください。神は、キリストにおいて、現在苦しんでいる方々の経験の中にも、同情的に入ってくださいるのである。

マルコ福音書の冒頭から、洗礼者ヨハネとイエスは共に、預言者イザヤが預言した通り神の支配が近づき、また神の霊がイエスにおいて行動していることを告げる⁽⁴⁾。一二節において、誘惑されるためにイエスを荒れ野に送り出しているのは、聖霊なのである。

続いて、一四節では、洗礼者ヨハネが逮捕される。ヨハネの逮捕は、イエス自身の逮捕を予告する。マルコ福音書は、開始早々、イエスの十字架上の死を考え、その意味を解釈しているのである。

すぐ続いて二一節では、イエスはガリラヤにおいて権威をもって教え、同情をもって癒しを行う。カファルナウム周辺におけるイエスの疾風のごときミニストリーは、教えと癒しの九つのエピソードを含んでいる。このカファルナウム周辺の旅の開始は、三つの仕方ではイエスの逮捕と十字架をあらかじめ説明している。すなわち、洗礼者ヨハネは逮捕されており、私たちはヨハネが首をはねられることになると知っている。ファリサイ派とヘロデ派の人々は共謀して、イエスの抹殺を画策する。そして、エルサレムの政治的宗教的支配層は、彼らの告発人をすでに派遣している。さらにこの部分は、イエスが後にエルサレムへ、そして自らの十字架刑へと進み行く動機づけを、三つの仕方ではあらかじめ説明している。すなわち、イエスはイザヤの預言した神の支配を宣言している。イエスのなさっていることの内に聖霊がおられる。そして、イエスは、解放を必要とする人たちのために、同情をもって行動している。マルコ福音書は、イエスの教えと、解放を必要とする人々への同情とを指し示すことで、十字架を説明するのである。福音とは、癒しと解放を必要とする人々に対するイエスの同情であり、イエスのうちに見られる神の同情である。そしてこの同情は、間違いなく放射能汚染地域の人々に対する同情と解放を含んでいる。

カファルナウム区分（一・二一―三・一一）

この部分は、直訳すると「そして彼らはカファルナウムの中に入つていった (enter into)」という言葉で始まる。この中に入るというテーマは、この区分全体を通して、重要な仕方では響き渡っている。神は――神の霊において、神の御

子において、イエスにおいて——、ドラマティックな仕方、人々の生の中に入つてくださる。それは特に、支配の制度や、あるいは自分自身の恥によつて閉め出されて、(closed out) しまつている人々である。あるいは、それ以外の理由で苦しんでいる人々についてもあてはまる。ギリシア語では、動詞エルコマイ(入る、面前に来る、居るという意味)は、接頭辞を伴うものも含めると、この区分に二九回出てくる。(ヨハネ福音書では、この動詞は受肉を指して使われる——神は、イエスにおいて地に来られ、イエスにおいて私たちの間に入られる⁽⁵⁾)。この動詞は、マルコ福音書において、際立つた塊となつて出てくる。それはまさに、イエスが同情をもつて、癒しと救しを必要とする人々の生の中に入つてくださるということのしるし(markers)なのである。

カファルナウム区分の最初の節(二二二)は、同じく「入る」という意味の別の動詞(エイスポレウオマイ)をもつて、このテーマを宣言する。第一のエピソードでは、汚れた霊が、「我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」と語る。言い換えれば、イエスがなさつておられることにおいて、神が活動しておられるのである。第二のエピソードでは、イエスはシモンとアンデレの家の中に入られる。そこでイエスは、シモンのしゅうとめをお癒しになる。彼女のもとにやつて来て、その手を取つて起こし、しっかりと同情をもつて触れる。それは、病を持った彼女の世界のただ中に入るドラマティックな形式である。第三のエピソードでは、人々がイエスのもとに、病人を連れて来て(人々がイエスの面前に来ることを示す、もう一つ別の動詞)、イエスは彼らをお癒しになる。第四場面では、重い皮膚病の人が、イエスのもとに来て懇願し、ひざまずいて次のように言う。「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」。そしてイエスは、同情の思いに満たされる(二二四)。

この福音書において、この後イエスは、人々の飢えや癒しの必要に對する同情に動かされている(六三三四、八二二、九二二、一〇四七—四八、参照五二一九)。この同情は、人々の苦しみに参与し、彼らと共に苦しみ、彼らの痛みの場、癒しの必要のただ中に入り、彼らに触れるということである。このテーマは、イエスが最も好んでいた

預言者イザヤが強調したものである（イザヤ一三：一八、一四：一、二七：一一、三〇：一八、四三：四、四九：一〇、一三、一五、五四：七、八、一〇、五五：七、六〇：一〇、六三：七、一五）。イザヤが教えたのと同じくイエスは、神こそ「同情する方／憐れみ深い方」(the Compassionate One)であり、私たちのもとに来て現臨してください。私たちを解放してくださいる方であると教えた。権力者たちや権威者たちは、だれが癒されるべきかを自分たちでコントロールしたかったために、イエスの行動に対して怒りを抱いたが、イエスは彼らの怒りを物ともしないで、同情をもつて、人々の生のただ中に入つて行かれた。

イエスは、重い皮膚病の人に触れ、ドラマティックな仕方での排除された生の中に入り、彼を物理的な共同体の中に歓迎した。それはちょうど、病んでいた女性の手を取つて彼女を起き上がらせたのと同じである。イエスは繰り返して、見捨てられていた者たちの恥を癒し、彼らを共同体のメンバーにするように行動されたのである。

権威者たちの排除のイデオロギーのゆえに、イエスは皮膚病の男に対して、イエスが彼を清いと宣言したことをだれにも何も言わないようにと厳しく警告し、ただ自分の体を祭司に見せて、清いと宣言してもらうために所定の儀式を経るようにお命じになった。「しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のいない所におられた」（マルコ一：四五）。イエスは、支配的権威者たちの支配への決意に反して、同情をもつて行動されていたために、すでに彼らの怒りを買っていたのである。

第五場面は、印象的な存在への介入 (entry into presence) である。四人の男が中風の男をイエスのもとに連れて来たが、その家は既に人でいっぱい、入ることができなかった。そこで彼らは屋根の一部を剥がして、その男をイエスの現前に降ろした。イエスは中風の人に「子よ」と呼びかけて、象徴的な仕方では彼を御自身の家族の一員とした。そしてイエスは、彼の罪の赦しを宣言する。律法学者たちは、神お一人だけが罪を赦すことができると言つて（彼らは、だ

れが神に罪を赦されるかをコントロールしようとしていた⁽⁷⁾、イエスが神を冒瀆していると責めた。冒瀆とは、イエスが死刑判決を受けることになるのと同じ告発である(マルコ一四・六四)。そこでイエスは、「人の子が地上で罪を赦す権威を持つている」ということをお示しになり、この人を癒された。

第六場面では、イエスは徴税人のレビをご覧になる。徴税人とは、ファリサイ派の人々の目には見捨てられた者と映っている人々である。イエスは、レビに対して従う者となるように招き、彼の家に入つて、レビだけでなく他の徴税人や罪人たちとも、食事を共にするという親密な交わりを實踐された。これこそまさに、見捨てられた者の存在への介入(entry into the presence of outcasts)である。「わたしが来た(ここでもエルコマイ)のは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(二二・一七)。

第七場面では、彼らがイエスのもとにやつて来て、なぜイエスの弟子たちは断食をしないのかと尋ねている。イエスの答えは、御自身の存在について語る。「花婿と一緒にいるかぎり、断食はできない。しかし、花婿が奪い取られる時が来る」(二二・一九b—二〇a)——ここでもまた、十字架が予告される。

第八場面では、イエスは、ダビデが従者たちの飢えを満たすために、神の家の中に入つて、彼らに「御前の供えのパン」(the bread of the Presence)を食べさせたことについて語っている(二二・二五—二六)。それは、飢えている人々、必要を抱えている人々に対して、神が彼らのところに存在しておられるということである。

第九場面では、イエスは会堂にお入りになり、手の萎えた人をお癒しになる(三三・一一—一五)。

これとは対照的に、二二・六と二二・一六の律法学者たちと、二二・二四と三三・六のファリサイ派の人々とは、入ること、やつて来ることもしない。彼らは——離れた距離から(from a detached distance)——決して同情することなく、座して、観察し、イエスのなさることについて議論しているのである。マルコは、しばしば敵対的な関係を空間的に引き離すことや、対峙して立つ様子によつて描写する——エルコマイの対立概念である⁽⁸⁾。

マルコ福音書の最初の区分において、以下の四つのテーマが明らかになる。(1) イエスは、見捨てられている人々、癒しを必要としている人々、赦しを必要としている人々、食べ物が必要としている人々、また触れただき共同体の中に歓迎されることを必要としている人々の存在の中に入つて行かれる。(2) イエスは彼らに触れて、彼らを赦し、彼らと共に食事をし、彼らを見捨てられた立場から共同体の中へと解放される。(3) イエスはこのことを、同情／憐れみ (compassion) と、必要に対する感受性 (sensitivity to need) とから行つておられる。そして、(4) この同情と解放とにおいて、私たちは、神の靈、神の子が彼らを神の臨在 (presence) の中に招き入れて、分離と疎外を克服するという、神の御子の御性質 (character) を見るのである。この区分は、汚れた靈が「あなたは」神の聖者だ」(一・二四)と宣言することをもって始まり、靈どもがイエスの足下にひれ伏して「あなたは神の子だ」(三・一一)と云う場面で頂点に達する。皆さんが一致して、放射能汚染に苦しむ人々の必要を満たすために行動するとき、皆さんは神のしておられることに参与しているのである。

私は、イエスがただ単に人々の必要を満たすために行動していた、ということと言っているのではない。むしろ、自分自身の恥(の意識)のゆえに、あるいは見捨てられた立場のゆえに、神の臨在から排除されていると感じている人々の生の中に、イエスは神をもたらし神の靈をもたらし、ということである。イエスにおいて、神は防壁を突き抜けて人々の生の中に入り込んでくださるので、その人々はや、神からも他の人々からも、引き離されることがないのである。イエスは、権力者や権威者たちの排除のルールに従うことを拒絶している。その結果、「ファリサイ派の人々が出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた」(三・六)。

彼らは、イエスがこのことをサタンの方で行つていると言つて非難した。イエスは彼らに対して、うっかりすると見逃してしまいそうなアイロニーをもって反論する(三・二二―三〇)。すなわち、聖靈の力をサタンの方呼ばわりすること、彼らこそが神を冒瀆しているのだと。必要を抱えた人々の中に入り、見捨てられた人々を共同体へと迎え入れ

る聖霊の臨在を、彼らは退けているのである。イエスは言う。「しかし、聖霊を冒瀆する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う」(三二・二九)。マルコ福音書全体を通して、イエスは権力者たちに対して、悔い改めて聖霊の臨在を認め、神の道に立ち返るようにと招いている。

マルコは、なぜイエスが十字架に架けられたのかを語ることで、その福音書を書き始めている。イエスは、同情をもって見捨てられた人々の存在の中に入り、その人々を解放し、彼らを御自身また他の人々と共に共同体へと迎え入れたのであり、この同情的な解放行為においてこそ、イエスは神の子であり、聖霊としての神の臨在の道具なのである。イエスは、これら全ての人々を汚れた見捨てられた者として不当に (unjustly) 扱っていた権力者・権威者たちの支配に抗って、そこに行った。マルコは、このこともイエスが十字架に架かった意味だと言っているのだと、私は確信している。

私たちが神から引き離されることは、私たちの罪責感ばかりではなく、私たちの恥によっても引き起こされるのだと、私は主張したい。私たちは恥じ入って、それぞれのいちじくの葉という防御によって神から隠れる。贖いのためには、赦しだけでなく、私たちが隠れている所、私たち自身が恥じ入っている場所に、神が私たちと共に、神御自身の苦しみをもって入って来てくださることが必要である。これこそ、神がキリストにおいてしてくださっていることなのである。

悪魔的力、ヤイロの力、イエスの力(五二―四三)

マルコ福音書の五章において、会堂長の一人がイエスのもとにやつて来て、(エルコマイ)、その足下にひれ伏した。⁽⁹⁾

彼はイエスに、死の縁にある一二歳になる自分の娘を癒してくださいるようにと懇願した。彼は、娘に触れてくださるようにとイエスに懇願したのである。「……手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう」(二三節)。

ところがここで、何の社会的地位もなく、多大な恥を負った一人の人物によつて事態は中断される。一二年間も出血に苦しんでいたこの女性は、祭儀的汚れのうちにあり、おそらくその汚れの臭いもしていたであろう。その出血のゆえに、彼女には夫がなかつたと考えられる上、男性の支配する社会において、力のないものであつた。手持ちの金すべてを費やして多くの医者にかかつたものの、その医者たちに金を取られた挙げ句、ますます悪くなるばかりであつた。彼女は祭儀的汚れの状態にあり、夫がなく、お金もなく、男性の支配する社会にあつて、痛々しいまでに恥を負つていた。その彼女が助けを求めたイエスには、死の縁にある娘を抱えた重要人物のためにしなければならぬ、より差し迫つた用事があつたのである。⁽¹⁰⁾祭儀的汚れの状態にあることで、この女性は群衆の中にやつて来るべきではないし、だれにも触れるべきではなかつた。しかし彼女は、勇気を出して群衆の中へとやつて来て、(エルコマイ)、イエスの衣に触れた(イエスの臨在の中へのドラマティックな進入である)。彼女は、「この方の服にでも触れればいやしていただけた」と信じていた(二八節)。清淨規定に違反したといつて彼女を恥ずかしめる者は、だれかいたのだろうか。だれもい
なかつた。「すると、すぐ出血が全く止まつて病気がいやされたことを体に感じた」(二九節)。

イエスは、「わたしの服に触れたのはだれか」とお尋ねになつた。この女性は「恐ろしくなり、震えながら進み出て(エルコマイ)ひれ伏し、すべてをありのまま話した。イエスは言われた。『娘よ、あなたの信仰があなたを救つた。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らさない』」(三三―三四節)。イエスは、この女性に対して「娘よ」と呼びかけることで、彼女を、見捨てられた者としてではなく、しっかりと共同体に包摂された、イエス御自身の家族の一員として扱つているのである。イエスは彼女の信仰を賞賛している。そして、「もうその病気にかからず、

元気に暮らしなさい」と語った〔英文新改訂標準訳NRSVでは「平和のうちにいき、癒されなさい」〕。

そしてついに、イエスはヤイロの娘のもとに出かけて行く。マルコは、娘が寝かされている家にイエスが入られたことを、三回繰り返して語っている。まずエルコマイを使って二回、続いて、カファルナウム区分を開始した一・二一で使ったのと同じ用語、エイスポレウオマイを使って。そしてここで、イエスは四回目にだれかに触れている。イエスは、彼女の手を取つて、起き上がるように呼びかけた。そこでイエスは、同情を示される。イエスは彼女が空腹であることを察して、彼らに向かつて、「食べ物少女に与えるように」と告げられた（四三節）。

エルサレム入城（一一・一一三三）

イエスが人々の生のただ中に入られた出来事が集中する三番目の箇所は、一一章にあるが、それはエルサレムおよび神殿——すなわち、ユダヤの政治的宗教的権力の中心——への「勝利の入城」の場面である。イエスは、軍馬にはなく、ろばに乗られた。私たちが棕櫚の主日として祝っているこの出来事は、ゼカリヤ書九・九—一〇を成就する、平和のメシアとしてのイエスの入城として教えられるべきである。

娘シオンよ、大いに踊れ。

娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。

見よ、あなたの王が来る。

彼は神に従い、勝利を与えられた者

高ぶることなく、ろばに乗って来る

雌ろばの子であるろばに乗って。

〔彼〕はエフライムから戦車を、〔NRSV〕新共同訳では「わたし」

エルサレムから軍馬を絶つ。

戦いの弓は絶たれ

諸國の民に平和が告げられる。……

イエスは、御自身がエルサレムの権力と権威者たちの存在のただ中に入り、平和のメシアとして、非暴力によつて、彼らに立ち向かうことを宣言しておられるのである。

ここでもまた、物語は、「入って行く」という用語をもつて始められる。それは、カファルナウムのエピソードを開始したあの言葉、そして勇気を振り絞った女性とヤイロの娘の癒しを特徴づけたあの言葉である（エイスポレウオマイ）。人々は叫んで言った。「ホサナ。主の名によつて来られる方に、祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に、祝福があるように。……」こうして、イエスはエルサレム（の中）に、「入り」（entered into）、神殿の境内（の中）に（into）入られた（マルコー一・九一―一節）〔NRSVに合わせて調整〕新共同訳では「エルサレムに着き」〕。ここでも、入るといふ動詞が出てくる――三回も。人々がこの出来事を、イエスのエルサレム入城（entry）と呼び慣わしてきた洞察は正しい。エルサレムに入られると、イエスはすぐに権力の中心である神殿に入られ、すべてのものを見て回られた（一一節）。イエスが権力の中心であるエルサレム、また神殿に入られたのは、権力に立ち向かい、悔い改めへと招くためであつたといふことは、ここではこれ以上ないほどに明らかである。⁽¹¹⁾

「それから、〔イエスは〕エルサレムに来た。イエスは神殿の境内に入り、（エルコマイとエイスポレウオマイ）、そこ

で売り買いをしていた人々を追い払い始め」られた（一五節）〔NRSVに合わせて調整…新共同訳では「一行は」〕。タエ・ホー・リーは、イエスが貪欲な両替人を神殿から追い出した宮清め（一一…一五―一九）という預言者の象徴行為の諸解釈を、注意深く評価している。リーは以下のように結論づける。

イエスが神殿に対して象徴的預言行為を実行したのは、神殿による預言者の正義に対する違反と、その宗教的隠蔽のゆえであった。当時の「生活の座」としては、抑圧的で搾取的な社会経済的制度があり、過重な課税、負債を生み出す什一税（十分の一税）、また腐敗した大祭司たちと、彼らが神殿の運営によって得ていた不正な経済的利益があった。それゆえ、その反動として、大衆の預言者のメシア的抗議運動があった。神殿におけるイエスの四つの行動は、イエスが預言者の正義の主題に基づいて、神殿制度の不正義を批判したことを示している。イエスが引用したイザヤ五六・七とエレミヤ七・一一には、預言者の正義という共通する主題がある。それは、ミシュパト〔裁き…口語訳では公義〕とツエダカー〔正義〕である。過越祭の時期は、契約と解放と正義の時期である。イエスの十字架へと至る触媒的出来事であったと、多くの学者が考えている、この預言者の行為は、権威者たちの不正義に対する終末論的裁きの行為であった。正義は、イエスにとって、決して小さな幅次的主題ではない。それは、権威者たちを悔い改めへと導くか、それとも彼らがイエスの十字架刑を求めるようになるか、そのどちらかをもたらず対決行為であった。⁽¹²⁾

イエスは、権威者たちの不正義によって苦しんでいる人々への同情（compassion）のゆえに、彼らの不正義と対決したのである。「イエスの十字架」こそが、永遠に記憶されるほどにドラマティックな仕方、彼らの不正義と対決する唯一の非暴力的な方法であった。それによって、イエスの十字架は、数多くの十字架刑や、あるいはさほどドラマ

ティックではない仕方です。苦しむ人々に対する同情のゆえに、イエスがすべての不正義と対決してください。くださった出来事として記憶されるのである。イエスは、彼らに悔い改めるように呼びかけるために、彼らの不正義のただ中に入ってください。それはまた、不正義に苦しむ人々に対する私たちの同情のゆえに、私たち自身が不正義と対決するようと呼びかけるためでもあった。

マルコ二二・六では、イエスのたとえの中で、ぶどう園の農夫たちが、権力と富への欲望のために、共謀して主人の息子を殺すという出来事が語られている。「祭司長、律法学者、長老たち」(二二・二七)は、「イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた」(二二・一二)。ここでもまた、マルコは、イエスが権威者たちの不正義、権力、支配、そして富への欲望と対決したために、権威者たちがイエスを殺そうと共謀したことを告げている。このたとえを話すことによって、イエスは権威者たちがしていることのただ中へと入り、彼らと対峙し、彼らが悔い改めるべき罪を名指しされた。イエスは、弟子たちに悔い改めるように呼びかけているのと同様に、権威者たちに対しても、その支配と欲望、偽善を悔い改めるようにと呼びかけているのである(二二・一一一五、二四、三四、三八―四〇、一三・二九、三五―三六)。イエスは、権力者たちをも贖うことを求めておられる——もしも彼らが悔い改めるならば、であるが。

続いて二二・一四と二二・一八では、ファリサイ派、ヘロデ派、サドカイ派の人々が、イエスの存在の中に入って(エルコマイ)、イエスと論争や対話をしている。それは、律法学者の一人がイエスのもとに近づいて来て(プロセルソーン、プロセルコマイのアオリスト形)、イエスが立派にお答えになったことを認め、第一の掟は何かと尋ねる場面で頂点に至る。イエスは、二重の愛の掟によってお答えになる。この律法学者はそれに応答して、イエスの答えと預言者の教えの両方を肯定する。「先生、おっしゃるとおりです。……おっしゃったのは本当です。(それ)は、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています」。イエスは、「あなたは、神の国から遠くない」とお答えになった。

塗油とゲッセマネの園（二四：一―七二）

さらにもう一カ所、「入る」という動詞が塊で出てくる場所がある——一四章に二二回出てくる。一人の女性が、皮膚病人のシモンの家にやつて来て、葬りのためにイエスに油を注ぐ。イエスは葬りのために油を注いでくれた彼女の行為を誉めており、また無礼にも彼女を批判した人々に反対しているのである。

イエスは、最後の晩餐を祝う部屋の中に、弟子たちと共にやつて来る。またイエスは、弟子たちと共に、ゲッセマネの園の中にやつて来るが、イエスはそこで逮捕され、十字架に架けられるために連行されることになる。イエスは、自分が祈っている間、目を覚ましておられるようにと告げた弟子たちのもとに、三度やつて来るが、弟子たちは眠っている。イエスは弟子の長であるペトロに対して、彼がイエスを知らないと言った三度言うことになると告げる。そのとおり、ペトロは実際にイエスを三度知らないと言い、そして彼は恥じ入って、「いきなり泣き出した」（二四：六六―七二）。では、裏切り者はだれなのか。ユダは、ある人たちが詮索するように、ゼロテ党だとは言われていないし、またある人たちが示唆するように、守銭奴だとも言われていない。むしろ彼は、繰り返し「十二人の一人」だと言われている（二〇節および四三節）。このドラマにおいては、裏切り者はむしろ、弟子である私たちである。ユダは、弟子である私たちが代表しているのである。

イエスは、弟子たちがこうして失敗することを知られておられ、そのように彼らに告げておられた。十字架とは、神がキリストにおいて私たちのただ中に入つてくださった、私たちに対峙し、悔い改めるように呼びかけてくださった、そして、私たちの裏切りと否認とを、御自身の対峙する愛（*confrontive love*）の中に包含してくださる、ということである。

弟子たちの裏切り、否認、そして脱落は、イエスによつて、明白に十字架の意味の中へと取り上げられている。

イエスは弟子たちのことをよくご存知であつたと、マルコは私たちに語っている。弟子たちはしばしばイエスを誤解した。イエスは、誤解や否認、また裏切りさえも含めて、その彼らのただ中にお入りになつた。イエスが失敗した弟子たちと直接、そして誠実に対峙してくださるによつて、彼らは、イエスが完全な弟子たちを贖うのではなく、恥と罪責を負う人々を贖う、ということを理解するようになる。イエスは、私たちのような人々を贖つてくださるのである。イエスは、弟子たちの失敗を受け入れ、それを御自身と共に十字架へと持つて行つてくださる。イエスは、その失敗が共同体を破壊することをお許しにならないし、彼らを排除なさらない。むしろ、彼らに対して二度も、先にガラヤに行つてくださり、彼らとの共同体をなお維持してくださると告げている（一四・二八と一六・七）。

* わたしは、ヨハネ福音書の中にある、弟子たちが獲れた魚を岸に引き上げる、あのクライマックスの場面が大好きである。ペトロがこの場面の前に最後に登場したエピソードでは、ペトロは炭火のもとでイエスを否認した（ヨハネ一八・一八、二五―二七）。この場面では、イエスが岸で炭火を用意して、再びペトロを迎えている（ヨハネ二一・九）。ペトロが三度イエスを否認したように、イエスはペトロに三度問いかける。「あなたは」わたしを愛するか。ペトロは、イエスを否認したことをひどく恥じ入つていた。イエスは、そのペトロの恥の中に入つてくださり、彼を、イエスの羊を飼う働きへの参与者として回復してくださったのである。ペトロの指導力が必要とされており、彼はなお、その共同体に参与する者であつた。

** イエスは、外部の者を共同体の中に連れて来られる。無名の登場人物たち (minor characters) は、弟子たちが失敗したことを、イエスのために実行する。群衆は、イエスのもとに殺到し、その教えを熱心に受け取る。とはいえ、最後には、彼らも祭司長たちに煽動されて、イエスの十字架刑を叫び求めてしまう。弟子たちではなく、悪霊に取りつかれた息子の父親が、信仰を発揮する。食卓に着いていた者たちではなく、弟子の輪の部外者であつた女性が、イエスの葬りに先立つてイエスに油を注いだのであり、イエスは、福音が宣教されるどころではどこでも、この女性が記念されると

告げた。弟子の一人ではなく、異邦人であるキレネ人のシモンが、イエスの十字架を担いだ。「イエスは神の子であつて、ユダヤ人のメシア以上のお方であることを理解し、告白した最初の人間は、十二人のひとりではなく、異邦人であるローマの百人隊長であつた。イエスの体を引き取つて埋葬したのは、アリマタヤのヨセフであつた。……最後に、イエスが葬られた後で、イエスに香料を塗りに来て、イエスが復活されたとの知らせを受け取つたのは、弟子たちではなく、女性たちであつた」。

このゆえにこそ、イエスはエルサレムに行つて、政治的・経済的・宗教的権威者たちの現前に入つて行かれたのである。イエスは、彼らの不正義、権力による支配、分断された忠誠心、富の収奪、見捨てられた者たちの排除、そして彼らの暴力に対して、彼らと対決した。イエスは、それが神の御心であるので、彼らのところに入つて行き、彼らに悔い改めを呼びかけた。それが、実際に衝撃を与える仕方、悔い改めのメッセージを権力者たちのもとに届ける唯一の方法であり、また彼らの暴力と不正義を、悔い改めと変革の呼びかけの中に組み込む唯一の方法だつたのである。

イエスは現実主義者であつたので、彼らが悔い改めるとは、少なくともその全員が悔い改めることは期待していなかった。しかし注目すべきことに、彼らが陥れるための質問を浴びせたときにも、イエスは常に、彼らが聖霊を認め、すべての命に勝る神の権威を認め、またモーセの権威を認めることになるような質問を投げ返して、彼らに答えている（マルコ二二・二九―二二・二六）。それは、決断を余儀なくされる状況に彼らを追いやることで、彼らに神の権威への忠誠を認めさせるためであつた。それだから、一人の誠実な律法学者がイエスに重要な筈に関する質問をし、イエスの答えを認めたときに、イエスは彼に、「あなたは、神の国から遠くない」（マルコ二二・三四）とお答えになつたのである。⁽¹⁵⁾

イエスは権威者たちの存在の中へも、同情をもつて入つて行かれたか？

権威者たちはエルサレムでイエスを十字架に架けることになるのだが、イエスがそのエルサレムの権威者たちの存在の中に入つて行かれたのは、彼らに悔い改めを呼びかけることを求めていた神の御心を、イエスが成就した出来事であった、というように解釈することは、はたしてできるのだろうか。神の御子を十字架に架けるといふ、この最も強力な恐るべき不正義の示威は、多少なりとも権力を持つ私たちすべてに対して、悔い改めを呼びかける。それは、私たちが、侵害されている人々に反して暴力の側を支持し、自分よりも力のない人々を支配し、周辺へと追いやられた人々を排除し、貧しい人々から強欲にも奪い取り、イエスを裏切りまた否認し、見張りとしての責任を果たすことに失敗することに対して、悔い改めるように呼びかけるのである。

権威者たちに立ち向かいたい (confront) と考える人も、当然ながらいるだろう。福島原発を建設した者たちや、適切な仕方での災害に対処しなかつた者たち、あるいはそもそも原子力に依存することを決断した者たち、また十分に節電を指導しなかつた者たちに立ち向かいたいと考える人もいるだろう。私が言いたいのは、イエスは単に必要を抱えている人々の存在の中に入られるだけではなく、権威者たちに対しても立ち向かい、正義を要求される、ということである。

マルコが語っているように、イエスは、エルサレムの権威者たちがイエスを十字架に架けさせようと画策していることを重々承知の上で、なお彼らに立ち向かい、彼らに悔い改めを呼びかけるためにエルサレムに入れ、そこにいる権力者たちと権威者たちの存在の中に入られたのである。明らかに、十字架は、すべて抑圧する者、排除する者、強欲な

者、暴力を行う者、そしてイエスを否定し裏切る者の罪に対する裁きである。私たちは皆、ドラマの中で役割を担っているのである——かつて、そして今も。イエスは私たちの罪のために死んでくださった。したがって、イエスの死は、明らかに私たちの罪に対する裁きである。しかしそれはまた、イエスを裏切り、否認し、見捨てたあの弟子たちに対してそうであつたように、エルサレムの権力者や権威者たちに対してさえ、またイエスを十字架に磔にしたローマ人たちに対してさえも、神の同情 (compassion: 憐れみ) だつたのではないだろうか。

イエスは十字架の上からこう言われた。「父よ、彼らをお赦しくください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ二三・三四)。

イエスは弟子たちに言われた。「また、立つて祈るとき、だれかに対して何か恨みに思うことがあれば、赦してあげなさい。そうすれば、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちを赦してくださる」(マルコ一・二五)。これは、「祭司長、律法学者、長老たち」を赦す、ということなのではないだろうか。

一五章は、ローマ人たちがイエスを十字架に磔にする場面であるが、その場面は、彼らと私たちの罪を明らかに示して裁くような仕方では語られている。この裁きの場面において、私たちは皆、役割を担うのである——すなわち、ユダヤ人の権威者たち、異邦人の十字架刑執行人たち、イエスを裏切り、否認し、見捨てた弟子たち、である。しかしそこには、悔い改めのしるしもある——すなわち、イエスの十字架を担いだキレネ人シモン、「本当に、この人は神の子だつた」と告白したローマ人の百人隊長、「勇気を出してピラトのところへ行き、イエスの遺体を渡してくれるようにお願いした……、アリマタヤ出身で身分の高い議員ヨセフ……。この人も神の国を待ち望んでいた」(新共同訳の語順を、NRSVに合わせて入れ替えた)、そして、速くから見守っていたが、しかし後には、イエスに塗油するために香料を持ってやつて来た(エルコマイ) 婦人たちである。

十字架は、確かに罪に対する対決であり裁きである。しかし私は、十字架が、悔い改めと、神の国に近くあることに

対する憐れみ深い (compassionate) 祝福でもあつて、それは一人のローマ人百人隊長にさえ、一人のユダヤ最高法院の議員にさえ、一人の律法学者にさえ、そして遠く離れていたが、後にイエスのもとに來た女性の弟子たちに対してさえも、そうであるということ提案したい。イエスは、私たちの罪のために死んでくださった。それは、私たちが男性の弟子であろうが女性の弟子であろうが、あるいはローマ人の十字架刑執行人であろうが、エルサレムの権威者であろうが、変わらない。問題は、私たちがどのように応答するか、なのである。

これこそ、私たちの恥の中に入り、不正義に立ち向かう方法

十字架とは、「古代後期に行われていた、最も恐ろしく、痛ましく、恥辱に満ちた処刑方法であつた。」⁽¹⁶⁾
モルナ・フッカーは次のように書いています。

私たちは、……十字架が尊ばれる象徴となつている「私たちの」文化から、それが徹底的な名譽剥奪……を意味していた文化へと、私たち自身を移し替える必要がある。……もしも奴隷であれば、あるいは裏切り者か、ローマの敵対者であれば、その人が十字架の上で終わりを迎える可能性は、極めて高かつた。……十字架刑の犠牲者は、長時間におよぶ恐ろしく痛ましい死を味わうことになる。人間を裸で釘付けにするということは、——生きていようが死んでいようが——相手に被らせることのできる最大級の侮辱であつた。したがつて、十字架刑は、死刑と苦痛に満ちた拷問、そして徹底的な屈辱とを結合したものであつた。……ローマ帝国においては、それは第一義的に、奴隷に対する刑罰として使われた。十字架刑の脅威よつて、奴隷が

屈従するのである。……「ちようど、そう遠くない過去に、アメリカ合衆国においてリンチが果たしていたのと同じように」。さらに言えば、この野蛮な死は、犠牲者の体を裸で公衆の面前に晒すということも伴っていた——それは、最終的な、究極の名誉剥奪であつた。⁽¹⁷⁾

イエスは確かに、恥の中へと入ってくださった。最後の晩餐の中で、イエスは言われた。「はつきり言っておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作つたものを飲むことはもう決してあるまい」(一四・二五)。十字架上で息を引き取ろうとしているそのとき、そばにいた者が駆け寄つて、酸味のあるぶどう酒を海綿に吸わせて「イエスに飲ませようとした。しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた」(一五・三六—三七)。はたしてこれは、イエスの十字架上の死が、同情をもつて恥と苦しみの中に入り、また不正義を行う権力者たちや、イエスを裏切り否認した弟子たちに対する対決である一方で、同時に、神の国に入ることもあつた、ということなのだろうか。マルコ福音書のクライマックスは復活ではない——復活は、はつきりと約束されてはいるが、描写されていない。マルコ福音書のクライマックスは、十字架なのである。

マルコ福音書のイエスのドラマは、贖いのドラマである。なぜならそれは、私たちが——不正義の犠牲者である私たち、恥じ入る弟子である私たち、また罪責を負う権力者である私たちが——自分の防御装置によつて恥のうちに隠れているときに、私たちの生のただ中に「来てくださった」、キリストにおける神の憐れみ深い (compassionate) 到来 (のドラマ) だからである。キリストは、私たちの逃避と否認、また敵意と暴力と支配の権力とに立ち向かつてくださり、それらを御自身の上に引き受けてくださることによつて、またそれらを隠されたまま、疎外されたままになさらないことによつて、それらを克服してくださる。

さらにもう一つ加えるなら、私たちは皆、死を恐れており、とりわけ、交わりを持たないまま一人孤独に死ぬことを

恐れている。疎外と恥、暴力、死の恐れは、唯一、そのただ中に入り込んでそれらと対峙し、それらに触れることによって、また私たちが神と他の人々の共同体の中へと携え入れることによってのみ、癒すことができる。これこそ、十字架において、神がキリストにあつて成し遂げていくくださることである。これこそ、一ヨハネ四・一八が意味するところである——「完全な愛は恐れを締め出します」。

それだからこそ、私たちは“Overshadowed by His mighty love”（神の力ある愛の影に [Ironside & Schuler]）と賛美し、“You are not alone”（あなたはひとりではない [Mavis Staples]）と賛美し、“Christ with me, Christ before me, Christ behind me, Christ in me”（キリストは私と共に、私の前に、私の背後に、私の内に〔聖パトリックの祈り（胸当て）の詩による：Shaun Davey, “The Deers Cry”〕と賛美するのである。それはユルゲン・モルトマンがその著書『十字架につけられた神』において指し示したことであり、シロストラウ・ヴォルフがその著書 *Excision and Embrace*（排除と包摂）において、北森嘉蔵がその著書『神の痛みの神学』において、そしてノーマン・クラウスがその著書 *Jesus Christ Our Lord*（我らの主イエス・キリスト）において指し示した^{（訳注本）}ことである。

イエスがなさることにおいて神がなさることによって、贖いが生じるのである。私たちは、イエスがなさることのうちに、私たちに向かつて私たちのうちで行動される聖霊として神を見、また神の御子として神を見るのである。イエスは、「見えない神の姿」（コロサイ一・一五）である。キリストにおいて私たちが経験する神は、私たちの苦しみの中に入り、私たちの恥、私たちの罪責、私たちが神から隠れ、神から引き離されている所に入ってくださいる神である。私たちは、神が、私たちの築いた隔ての壁を、受肉をもって通り抜けてくださり、それによって壊れた関係を癒してくださいる、という経験をする。十字架とは、私たちが最悪の仕方^{（訳注本）}で神との関係性を排除し、神との間に暴力的な隔ての壁を打ち立てることである。神はキリストにあつて、まさにその十字架において、私たちが関係性を拒絶するその拒絶を乗り越えて私たちの中に入ってくださいるのであり、その関係を回復してくださいるのである。そのことによって、私たちは、

もし信仰を持ち続けるならば、和解させていただき、神の臨在のうちに生きることができるようになる。したがって、私たちが行う最悪を通して、なお、神は関係を回復してください（コロサイ一：一二一参照）。十字架は不正義の典型である。そしてイエスは、エルサレムに行き、その十字架に向かって行くことよって、私たちのあらゆる不正義の中の不正義そのものに立ち向かい、それを露わにしてください——すなわち、私たちの支配と暴力、また他者の排除と収奪である。キリストにあつて神は、不正義を公然と晒しものにし、それによつて不正義がどれほど恐ろしく間違つているかを私たちに対して明らかにされる。「キリスト」は、もろもろの支配と権威の武装を解除し、キリストの勝利の列に従えて、公然とさらしものになさいました」（コロサイ二：一五）。

共に同情的苦しみに入ることを呼びかける私たちへの招き

マルコ福音書と、イエスがその上で苦しんで死んだ十字架とは、私たちすべてに対して、福島原発事故の災害に苦しむ人々の苦しみの中に入るように呼びかける招きである。多くの日本人と他の国々の人々が、この災害の被害者を支援するために行動を起こしている。多くの人たちは、同情 (compassion) と共感 (empathy) を持ち、痛みを共有して、その人たちが自身の痛み、苦しみ、また屈辱の経験のただ中に入っている。この同情こそ、私たちがマルコ福音書の最初から十字架そのものに至るまで、イエスのうちに見出すものである。私は、皆さんが行っていることを、心から深く励ましたいと思う。多くの人々の努力に対して、深い感謝を覚える。

マルコ福音書と、イエスがその上で苦しんで死んだ十字架とは、様々な種類のキリスト者が、同情と敬意をもつて他のキリスト者の存在の中に入り、共に一つの共同体となるように呼びかける招きでもある。それは、日本人の同胞たち

が恥と離別を克服するためのモデルとなるものである。私は、日本のキリスト者の皆さんが、この災害の被害者に対して、また同様にお互いに対しても、同情をもって共に働き、互いに協力している姿に、深い感謝を覚える。

ここで、個人的なお話することをお許しいただきたい。私は少年時代に、父が戦争に行つて留守であつたため、ひどく寂しい思いをしていた。しばらくの間、私たちは父が戦死したのだと思つていた。そのため、深い苦痛を味わつた。ところが、父は生還した。日本が降伏を表明した翌日、まだその降伏が正式に調印される前に、父と、その他三名の米国海軍兵士は一台のジープに乗つて、日本にあるすべての戦争捕虜収容所へ出かけて行き、彼らを解放し、病人たちを東京湾に停泊している医療船に移送した。そこで父は、日本の人々が経験した多くの恐ろしい破壊を目の当たりにした。父が家に戻つて来たとき、彼は私に言つた。「グレン、戦争は恐ろしいものだ。だから私たちは、あらゆる手を尽くして第三次世界大戦を防いで、二度と原子爆弾が使われないようにしなければならぬ」。父は、国際連合の創立者の一人となり、米国政府の中に軍備管理軍縮局 (Arms Control and Disarmament Agency) をスタートさせた。多くの日本人がそうしたのと同様に、父はその生涯を平和づくりに捧げた。私は皆さんに心から感謝したい。

また私は、少年時代に広島と長崎の原爆のことを知つて、深い衝撃を受けた。私は年若かつたが、それでも、この二つの都市の人々と共に苦しんだ。原子爆弾が、世界中の他の国々にも拡散していくような思いに囚われ、戦争による巨大なキノコ雲が世界全体を覆つてしまうような思いに囚われた。それで私は、キリスト者がそれぞれ自分たちの教会を、イエスに従い、正義の平和づくりを支持し、二度と同じ戦慄すべき惨劇を繰り返さないために働く教会にするように力づけようと、自分の生涯を捧げた。

私は、自分の国が広島(と長崎)、そして日本の皆さんに対して、あのようなことを行つたことについて、深く恥じ入り、お詫びを申し上げたい。私の母国には、イエスが十字架において私たちにお与えくださった、あの同情、対決、そして悔い改めへの招きが必要なのである。私は、皆さんが寛大にも、再び来日するように私をお招きくださり、皆さん

んが福島事故の災害からの復興に尽力し、再びこのような災害が繰り返されないために行動を起こしている、その同情に満ちた努力に、このように私を参加させてくださったことに対して、心から感謝を申し上げます。皆さんがホアン・マルティネスと私をお招きくださり、癒しの働きに参加させてくださったことと併せて、皆さんが福島原発事故以降の癒しの働きに、教会的伝統の異なる日本のキリスト者の仲間を招いてくださることに對しても、心から感謝を申し上げます。

付論・受肉論的十字架論

イザヤ書五三章は、「彼は軽蔑され、人々に (by others) 見捨てられ」た、と語る(三節)。ここで彼を軽蔑し、見捨てたのは、イスラエルの権威者たち、ローマの権威者たち、そして弟子たちであつて、神ではない。「彼が担ったのはわたしたちの病／……であつたのに／わたしたちは思つていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と」(四節)。実際には、彼を打ちのめしたのは人々であつたにもかかわらず、私たちは、彼が神に打ちのめされたと考えるという過ちを犯していたのである。彼が引き受けた苦しみは、私たちの罪、私たちの暴力、そして私たちの神に対する不信仰が引き起こしたものであつた。「正義がねじ曲げられて、彼は取り去られた」(八節)(NRSV)

からの訳」。マルコ福音書において、正義をねじ曲げているのは、人間の権威者たちまた弟子たちであつて、神ではない。神は不正義を行わないのである。しかし、「痛みによって彼を砕こうとされたのは、主の御心であつた」(一〇節)〔NRSVからの訳〕。私は、この聖書箇所を提示することによつて、権威者たちや弟子たちは過ちを犯したが、神はその過ちを用いて、私たちに贖いをもたらしてくださった、ということをお願いするのである。

私は、エルサレムの聖墳墓教会を訪れて、イエスの十字架を描いた二点の絵画を深く思い巡らしているうちに、「イエスは私たちのために死んでくださった」ということが、イエスは私たちの罪のゆえに死んだ、すなわち、私たちの罪がイエスの死をもたらした、という意味であると信じるように突き動かされた。それはまた、イエスの死によつて、私たちに赦しを提供し、悔い改めへと招くものとして、神が私たちのもとに存在するようになってくださった、ということをも意味している。そしてこの招きは、イエスの死後も、イエスの弟子たちを通して続いているのである。またそれは、イエスがその死によつて、同情 (compassion) をもつて、防御装置と否認の障壁を突き抜けて、私たちの恥と罪責と疎外の生の中に入つてくださった、ということをも意味している。イエスは、私たちの罪のために死んでくださったのである。

私たちは、自らの罪と罪責と恥の中で、ねじ曲げ、誤認する。また私たちは否定し、誤解する。強欲を實踐する。排除する。私たちは支配し、不正義を行い、暴力を行う。そうすると、私たちは隠れ、逃れ、まるでしなかつたかのように見せかける。イエスは、私たちがそうしなかつたかのように見せかけてくださるのではない。そのことと対峙 (confront) してくださるのである。イエスは、安価な赦しを与えることはなさらない。私たちが隠れているそのただ中にお入りになり、私たちの罪の破壊性を御自身の上に引き受けてくださる。イエスは私たちが、御自身の生に参与する者としてくださるのである。イエスは、私たちの過ちの深さを軽く見ておられるのではない。むしろ、御自身の受肉の愛のゆえに、そして私たちが悔い改めへと招くために、その代価を支払つてくださるのである。

罪とは、神の臨在 (presence) と信頼性との回避 (evasion) である。人々を罪から贖うために、神はそのただ中にお入りくださり、それによって私たちの回避を切り裂いてくださる。また罪とは、受肉の弟子づくりという神の方法に對する疑いであり、回避でもある。私たちが神と神の方法を回避するときには、私たちは不可避的に、なんらかの代替神 (God-substitute) を採用し、その方法に従うことになる。私たちは、その代替神の重要性によって自らの偶像崇拜的な生活様式を確保しているのです、その代替神を守ろうとする衝動に駆られてしまう。罪から贖うために、神はその本質が回避であり、疑いであり、不従順であり、また偶像崇拜であることを暴いて (reveal) くださる。罪はまた、権力と支配と強欲への誘惑でもある。私たちを罪から贖うために、イエスは権威者たち、支配者たち、強欲な者たちに立ち向かってくださり、彼ら (私たち) がイエスを十字架に架けたときに、その悪をドラマティックに暴いてくださった。十字架とは、神の御子を十字架刑で処刑することであり、私たちが成し得る最悪の行為である。この一つの出来事の中に含まれているのは、暴力であり、憎悪であり、排除であり、支配であり、権力や富みに対する強欲であり、また回避である。神は、このすべてを神御自身の生に引き取ってください、なお憐れみ (compassion) をもって私たちの生の中に入つて、私たちのもとに存在してください、私たちを御自身の共同体に参与する者としてくださるのである。贖いは、このように生じるのである。

私たちが神を回避するとき、防衛的になり、恥じ入り、そして——時には怒りと暴力によって——自らの防衛と回避を擁護しようとする。私たちは、神に私たちの隠れているただ中に入つていただき、関係を回復していただくことによって、その衝動的な防衛を突き崩していただく必要がある。十字架とは、神がまさにその防衛、すなわち、支配し、排除し、抑圧し、暴力的な防衛、神の御子さえも否認し、裏切り、拒絶する防衛のただ中に入つてくださることなのである。十字架とは、私たちに對するキリストにおける神の臨在であつて、それは私たちの強欲と暴力の中にさえも入つてくださるものである。それは、しばしば殺害という暴力や神の憐れみ (compassion) の拒絶に至るような、私たち

の最悪な状態であるときにさえ、私たちを赦す行為である。十字架は、悔い改めへの呼びかけであり、神の宣教への受容と参与を提供するものである。十字架は、神の臨在を明らかにし、神の共同体へと私たちを招くものである。しかし、私たちはなお、私たちがふたたび不従順になり、不信の念を抱き、敵対的になってしまふのではないかと恐れる。神を信頼することを恐れるのである。それゆえに、私たちは、神が私たちの敵意を十字架において引き受けてくださることが必要であり、また（それによつて）、〔神による〕臨在と編入の提供が、私たちの敵意によつて無効になることはない、ということを示していただく必要がある。「わたしは……、あなたがたより先にガリラヤへ行く」（マルコ一四：二八）。わたしはあなたがたを見捨てない、ということなのである。

もしも受肉が本当に、まだ私たちが神の敵であつたときに神が私たちの生にお入りくださった、ということであるならば（ローマ書五章）、排除された人々の生に受肉論的に入り、その人々を共同体の中に回復させるというテーマが、十字架にとつて中心的でなければならぬ。イエスの聖性 (holiness) は、外部の人々からの分離 (separation) において見られるものではなく、その人々を共同体へと招き入れる、救贖的同情 (redemptive compassion) においてこそ見られるものである。「敵を愛しなさい」とのイエスの中心的教えは、単なる感情ではなく、他者の視点の中に入り、他者を共同体に招き入れることなのである。イエスの十字架は権威者たちの怒りの結果であるが、それは、見捨てられた人々の必要の中に入り、彼らを共同体の中に招き入れたイエスの同情的介入 (compassionate entry) に対する怒りであり、また、イエスが彼らの〔神殿〕境内に入り込み、彼らに悔い改めを迫つたことに対する怒りだったのである。

注

- (1) 以下の考察は、近々出版される以下の著書において私が述べていることの一部である。 *A Thicker Jesus: Incarnational Discipleship in A Secular Age* (Louisville, KY: Westminster John Knox Press, 2012).
- (2) N.T. Wright, "The Cross and the Caricatures: A Response to Robert Jenson, Jeffrey John, and a New Volume Entitled *Pierced for Our Transgressions*," (on-line article; Fulcrum, 2007 [http://www.fulcrum-anglican.org.uk/?2205]). ㄻㄻㄻㄻ Joel B. Green and Mark D. Baker, *Recovering the Scandal of the Cross: Atonement in New Testament and Contemporary Contexts* (Downers Grove: IVP, 2000), 27-31 他多数を参照。
- (3) マルコ福音書は、神の子としてのイエスのマイゼンテーネーが何を意味するのかが、次第に明らかになっていく。これがマルコ福音書のキリスト論の無点ではない。 Craig Evans, *Mark 8:27-16:20*, WBC (Nashville: Thomas Nelson, 2001), lxxi-lxxii. 「……ほとんどの学者が一致してこのことだが、『神の子』という称号は、イエスの最も重要な称号である」 W.R. Telford, *The Theology of the Gospel of Mark* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), 38.
- (4) マルコ福音書の冒頭の意義についての示唆は、読む議論によって、 Rikki Watts, *Isaiah's New Exodus in Mark* (Grand Rapids: Baker Academic, 2000) 第三章と第四章を参照。
- (5) この動詞は、マルコ福音書に八二回登場する。マタイもルカも、マルコの強調を踏襲しており、マタイには一〇八回、ルカには九七回出てくる。ヨハネ福音書はこの動詞を一四二回使っている。これは福音書の特長な強調であって、パウロ自身の手紙とパウロ系列の手紙では、全体を合わせても六九回の使用である。
- (6) Watts, *Isaiah's New Exodus in Mark*, 323-24.
- (7) 同書、一五五頁。
- (8) Ched Myers, *Binding the Strong Man: A Political Reading of Mark's Story of Jesus* (Maryknoll: Orbis, 1988), 393.

- (9) マルコ福音書では、神への愛と隣人への愛の大いなる掟についてのイエスの教えを肯定した律法学者についても、イエスは賞賛している。「あなたは、神の国から遠くない」(一二:三四)。イエスは、律法学者たちのためにも、会堂長たちのためにも、死んでくださったのではないだろうか。
- (10) Ched Myers, *Binding the Strong Man*, 134 を参照。この部分の着想について、エリン・デュフォルトーハンター氏に感謝する。
- (11) 同書、一四七頁。
- (12) Tae Ho Lee, "Jesus, Social Justice, and the Reform of Chaebools," Ph.D. dissertation, Fuller Theological Seminary (Pasadena, CA, 2006).
- (13) 「マルコの語りは、イエスの道に対する共同体の忠誠が崩壊していくことにおいて、弟子たち一人一人——ペトロやユダだけではなく——の共犯性を強調する」。Ched Myers, *Binding the Strong Man*, 365.
- (14) Telford, *Theology of the Gospel of Mark*, 134.
- (15) 私は頻繁にマイヤーズの著書から引用しているが、それはマイヤーズの考察が極めて洞察に富んでいるからである。すなわちマイヤーズは、十字架のドラマを、その現実の歴史の中に効果的に位置づけているのであり、また、ラディカルな受肉の弟子づくりのテーマを中心に据えているのである。ただし、マイヤーズの紛争社会理論 (conflict social theory) と、私自身のより多元主義的な理論——それも紛争に関わるのだが——とは、この点について異なる見方をしている。Myers, 317-8 を参照。
- (16) Evans, *Mark 8:27-16:20*, 511.
- (17) Morna D. Hooker, *Not Ashamed of the Gospel: New Testament Interpretations of the Death of Christ* (Carlisle, UK: Paternoster, 1994), 8-12, 15. Green and Baker, 192-209 を参照。

断片

- * Jürgen Moltmann, *The Crucified God: The Cross of Christ As the Foundation and Criticism of Christian Theology* (New York: Harper & Row, 1974); 邦訳は、J・モルトマン『十字架につけられた神』喜多川信他訳（新教出版社、一九七六年）。Miroslav Volf, *Exclusion and Embrace: A Theological Exploration of Identity, Otherness, and Reconciliation* (Nashville: Abingdon, 1996)。北森篤蔵『神の痛みの神学』（新教出版社、一九四六年／講談社、一九七二年／教文館、二〇〇九年）。C. Norman Kraus, *Jesus Christ Our Lord: Christology from a Disciple's Perspective* (Scottsdale, PA: Herald, 1987); 日本語版は、C・ノーマン・クラウス『しもべとなった主——弟子たちのキリスト論』棚瀬多喜雄訳（新教出版社、一九八七年）。

日本キリスト教史における東北

山口陽一

1. はじめに

「これからの一〇〇年を見据える」ために一〇〇年を振り返りたい。年数としての一〇〇年ではなく、エポックとしての明治維新から一四五年、アジア太平洋戦争敗戦から六七年を考える。また、四〇〇年前の東北におけるキリシタンの歴史についても触れたいと思う。

「一体性」は日本と日本のキリスト教の特徴と見なされることが多い。しかし、小さな島国である日本も日本のキリスト教も地域的特徴を有している。キリシタン史^①における東北、明治以降の東北とキリスト教、特にハリストス正教会^②、そして戦後日本における東北について考察し、東日本大震災が日本キリスト教史において持つ意味を考える。

2. キリシタン史（一五四九〜一八六三年）における東北

東北における本格的なキリシタン宣教は一六一一年、伊達政宗⁽³⁾がソテロー (J. C. Sotelo)⁽¹⁾ を仙台に招いたことに始まる。伊達政宗は、すでに徳川幕府の迫害が始まっていた一六一三年、支倉常長⁽⁵⁾を貿易交渉の使節としてイスパニアに派遣する。一六一四年一月（慶長一八年二月）徳川幕府の「伴天連追放文」が発せられ京阪で迫害が始まる。同年四月、畿内のキリシタン七一人（京四七、大阪二四）が津軽に追放された⁽⁶⁾。こうした追放者あるいは避難した信徒たちが東北各地で布教し、ここに東北キリシタン史が展開する。東北には「キリシタンの世紀」と称せられるような華やかな南蛮文化の流行も南蛮貿易の利益もない。迫害により散らされた信徒たちと、生命をかけて牧会を続ける神父たちの苦難の歴史のみがある。

一六一三〜一六二〇年、支倉常長が派遣されていた時期が、仙台を中心とする東北布教の最盛期となる。支倉は洗礼を受け、教皇パウルス (Paulus) 五世にも謁見するが、目的は果たせず一六二〇年に帰国し、二年後に亡くなる⁽⁷⁾。そして、この年から仙台藩でも迫害が始まる。支倉の家臣、後藤寿庵⁽⁸⁾は、水沢に堰を築いて治水し、東北布教の中心となった。この水沢を拠点にして津軽、秋田、南部、最上、米沢など東北各地への宣教が進められた。

一六二三年、江戸の大殉教⁽⁹⁾の後に、仙台藩では後藤寿庵を追放し、カルヴァリヨ (V. Carvalho) が捕縛される。この時期に迫害を逃れたキリシタンが南部（盛岡）に潜入した。南部では一六三五年から翌年にかけて約一四〇人が処刑された。一六二四年には仙台でカルヴァリヨらが殉教、以後、寛永期の東北各藩の殉教者数は、久保田（秋田）一四〇、弘前八八、仙台三六三、南部一四六、米沢八六、庄内二五、白石七、山形三八、白河一六、会津五七、二本松一四、

新庄一〇、計九九〇人を数える。⁽¹⁰⁾一六三九年、日本人神父岐部ペトロは、水沢で捕縛され江戸で殉教した。

この世の幸いより天国の幸いを希求した神の民の信仰、神の国の喜びに生きた信徒たちの忍耐と希望が東北キリシタニ史の特徴である。その布教は生命をかけた証しであり、良き業の遂行であった。水沢の寿庵塚は、今も岩手随一と言われる水田地帯を支えている。

この歴史は世界と日本のキリスト教にとって貴重な遺産であるが、とりわけ東北のキリスト教会にとって励ましではないだろうか。

3. 日本の近代と東北のキリスト教

幕末の修好通商条約による開港地のない東北への宣教は、横浜・築地から、あるいは函館から開始された。東北のキリスト教を特徴づけるのは、函館からのハリストス正教会による伝教である。⁽¹²⁾函館にロシア領事館が置かれたのは一八五八年、翌年には聖堂が建てられ、一八六一年にはニコライ (Nikolai) ⁽¹³⁾が着任した。当時の函館は、いわば北の長崎であり、蝦夷地警備のための津軽・南部両藩からの兵、その他有為の人々が集まっていた。ニコライは、日本語はもとより、国史、儒教、神道、仏教、風俗習慣までを学び、国漢の読書ができるようになった。これは日本人土族の英学修業に比べて米英の学術を教えたプロテスタント宣教師にはない特徴であった。⁽¹⁴⁾一八六八年四月二四日（慶応四年四月二日）、沢辺琢磨⁽¹⁵⁾ら三人が正教会最初の洗礼を受けた。

一八七二年、ニコライは東京に移動し、函館と東京を結ぶ伝教が始まる。二月一三日、仙台で迫害が起こり、沢辺琢磨は捕えられ入獄、処分を受けた者は一四〇余名に及んだ。ちょうど横浜に日本人による最初のプロテスタント教会が

成立した年である。カトリックはそれ以前から浦上四番崩れ等の迫害を受けていた。プロテスタントに迫害がなかったとは言わないが、文明開化の担い手によるプロテスタントは比較的守られていた。

伝教は、白河、郡山、福島、仙台、古川、一ノ関、水沢、花巻、盛岡、八戸、青森をつなぎ、沿岸部の石巻、気仙沼、陸前高田、大船渡、釜石、大槌、山田、宮古へと延びる。今回の津波被災地はハリストス正教会の古くからの伝教地である。

一八七九年にハリストス正教会信徒は四〇〇〇人となり、一八八九年には一万六〇〇〇人となる。この間、宣教師はわずか三人である。一方、プロテスタントは一八八三年からのリバイバルにより八〇〇〇〇人だった信徒が一八九〇年には三万四〇〇〇人となる。ニコライは、欧化主義を背景に教勢の拡大をするプロテスタントに憤懣を隠さない。

「いま日本が正教に改宗する可能性はわずかしかない。日本にはプロテスタントとカトリックの宣教師がありあまるほどいる。五〇〇人近くもいる。それに日本はありとあらゆる分野で、プロテスタントとカトリックの国々の文明に魅了されてしまっている。(中略)いま、日本は、国家としての活動を盛んにするためのいわば資源として、外国の信仰を求めている。信仰でもそうなのだ。同じ目的のためには、ありとあらゆる現世の取引に適している非正教の教えのほうが、実際により役立つのだ。そこに正教の居場所はない」⁽¹⁶⁾。

プロテスタントも文明にとどまらず、宗教そして福音を語り、農村にも伝道した。一九世紀後半までは地縁血縁をたどり農村にも意欲的な伝道がなされた。しかし、二〇世紀に入り、プロテスタントが都市型の伝道と教会形成に移行して定着したのに対し、ハリストス正教会は停滞する。日本人の期待は、ロシアが敵国となったことも重なって、前近代の信仰を継承するハリストス正教から離れていった。ハリストス正教を日本の農村の「常民」(Folks)に定着させようとするニコライの情熱は結実せず、近代日本の「良民」(Citizen)に受容されたプロテスタントが優位となる。今、改めて東北のキリスト教に注目するならば、ハリストス正教の再考は興味深い。

一八六八年に新政府を設立した薩摩藩、長州藩を中核とする新政府軍と、旧幕府勢力および奥羽越列藩同盟が戦ったのが戊辰戦争である。明治のプロテスタントは、この敗者の側にいる。幕臣の植村正久、津軽藩の本多庸一、会津藩の井深梶之助、松山藩の押川方義等、政治的な立身出世を望めない若者が精神の維新を企てたのが明治のプロテスタントであると評したのは、同時代のジャーナリスト山路愛山である。

本多庸一は津軽藩命で横浜に学び、弘前教会を設立、青森県の自由民権運動を牽引した。盛岡の鈴木舎定は築地で入信、『盛岡新誌』を発行して自由党結党に貢献した。

仙台の自由民権結社である進取社は、ハリストス正教の信徒が中心となつて設立したもので、佐沼など信徒の多い東北に支部が作られた。進取社は、「地方ノ権力ヲ培養シテ西南人の下流ニ居ラス、独立不羈能ク自治ノ精神ヲ揮擲」することを目指して、民権運動を展開している。宮城県下には八〇、福島には六二、岩手には三五の自由民権結社が成立する。

東北のキリスト教は奥羽越列藩同盟以来の反骨精神をもつて自由民権運動に関わつたが、自由民権運動を抑え込んだ明治政府は、大日本帝国憲法（一八八九年）と教育勅語（一八九〇年）によつて天皇主権の国家体制を確立する。その後、「教育と宗教の衝突」論争期に教勢の伸びは止まり、地方における伝道は反キリスト教の逆風により苦境に陥る。日本が日清、日露戦争を経て富国強兵、脱亜入欧、和魂洋才の近代化に邁進する中、東北の農村教会は停滞する。二十世紀大挙伝道の頃より伝道は都市型となり、大正デモクラシー期のプロテスタントの成長は、大都市、地方都市において著しい。天皇制国家に同調する教会は、近代日本と軌を一にして上昇をめざし、やがて大東亜戦争遂行のために日本基督教団に合同することになる。

4. 戦後日本と東北のキリスト教

戦後、一九四八年の東北のキリスト教会数は、プロテスタント一五二、カトリック二八、ハリストス正教会五〇であり、プロテスタントとカトリックが全国比一〇%以内であるのに対し、ハリストス正教は三五%と突出している。⁽²²⁾これが二〇一〇年の統計では、プロテスタント五四八、カトリック六四、ハリストス正教会二三となる。⁽²³⁾ハリストス正教会は減っているが全国比はあまり変わらない。プロテスタントでは日本基督教団が一・三倍となったのに対し、それ以外は一八・六五倍となる。戦後の新たな教会の中では、保守バプテスタ同盟五六、ルーテル同胞教団二一などが特徴的である。⁽²⁴⁾戦前からの教会の粘り強い伝道をもつても、地域に根ざし、神の国をもたらす宣教は、緒に就いたばかりである。

岩手県大船渡市の山浦医院の院長、カトリック大船渡教会の山浦玄嗣は、ふるさと仲間が自然に理解できることばで聖書を翻訳しようと考え、二五年かけて気仙地方の方言を研究し、表記を確立して辞書を作り、『ケセン語訳聖書四福音書』を完成させた。このような地道さを、私たちは学ばなければならない。

戦後の東北は、敗戦により朝鮮、満州、台湾を失った日本において戦後復興を支える食料供給地となり、高度成長を支える労働力を首都圏に供給した。その意味で東北は日本の「植民地」だったと、「東北学」を提唱した民俗学者の赤坂憲雄は言う。赤坂氏は現在、福島県立博物館館長で東日本大震災復興構想会議の委員である。

「最初に僕のなかに浮かんだのは『なんだ、東北って植民地だったのか、まだ植民地だったんだ』ということです。かつて東北は、東京にコメと兵隊と女郎をさしだし、そしていまは、東京に食料と部品と電力を貢物としてさしだし、

迷惑施設を補助金とひきかえに引き受けている。そういう土地だったのだと⁽²⁵⁾。

日本における都市と地方の格差を「植民地」と表現するのは注意を要する。旧植民地の人々からすれば「植民地」の悲惨はそんなものではないと憤られるであろう。しかし、東北には確かに「植民地」的性格があり、原発事故はこれを露わにした。

私の義理の父は秋田の出稼ぎ労働者であり、妻は幼い頃、父と多くの時を過ごせなかったと言う。そうしたことを考えば、東北の各地では原子力発電関連施設の誘致により出稼ぎが不要になった。ところが原発事故により、その土地から村ごと避難を強いられることになってしまった。福島第一原発「運命の日」と言われる三月一日、二号機の格納容器が爆発しなかったのは「偶然」だったと言われる。この日に散らされた放射能との戦いは、いつまで続くかもわからない。

高橋哲哉は、原発を「犠牲のシステム」と呼び、そこからの脱却を語るが、次に引用する言葉からもわかるように簡単な課題ではない。曰く、「いかなる犠牲もない国家社会が成り立つかどうか、これはここでは答えることができない問題である。しかし、それでも、軍事基地や原発のリスクを限りなくゼロに近づけていく、そういう政治的な選択は十分可能だし、それをめざしていく必要があると私は思う⁽²⁶⁾」。

宗教学者として発言を続ける山折哲雄は、核抑止力を意識した戦後日本の核の平和利用は、冷戦終結後再定義の必要に迫られた。そこで問題になるのが「欲望」問題であるとして以下のように言う。「今、その再定義で問題になるのは、豊かさへの、利便性へのわれわれの『欲望』の問題ではないか。果てしない豊かさへの欲望を保証する電力。それを生む原子力発電に、賛成する、反対する、そのいずれの場合においても、今回の危機的な状況を機に、われわれの欲望の問題をどう考えるか。ここに行かないと根本的な議論にはなつていかないうような気がします⁽²⁷⁾」。

原子力発電という制御できない技術を進めるのが「欲望」であるとすると、「ここまで来てよい。しかし、こ

れ以上はいけない。あなたの高ぶる波はここできとどまれ」(ヨブ三八章一節、新改訳)というところを知らなければならぬのではないか。都市と地方の格差、犠牲のシステム、欲望の問題、こうした問いに日本のキリスト教はどう応答すべきであろうか。

5. 東日本大震災とこれからの一〇〇年

二〇〇四年のスマトラ沖地震の津波では二二万人、二〇〇八年の四川省大地震では九万人、二〇一〇年のハイチ地震でも津波により三二万人以上が死亡した。こうした自然災害はこれまでも起きたし、これからも起こるのであろう。一八九六年に二万二〇〇〇人の死者を出した三陸大津波、一九二三年に一〇万五〇〇〇人の死者を出した関東大震災に匹敵する記憶として、東日本大震災は一〇〇年後の歴史に残るであろう。いや、原発事故のゆえに、今後一〇〇年の世界を左右すると言つても過言ではない。この地震列島に五四基の原子力発電所を置くことは、世界の将来にも関わることなのである。これからの一〇〇年を見据えて、三つのことを述べて終わりたい。

第一は原発のことである。三二〇万人の日本人が犠牲となり、アジアにおいて二〇〇〇万人の犠牲者を出したアジア・太平洋戦争の猛省が「憲法九条」を生んだように、東日本大震災を契機として、廃棄物の最終処分もできない原発への過信を脱し、自然エネルギーへの大転換が図られるなら、二〇一一年三月二日は世界史に残る日となるだろう。一七五五年のリスボン大地震は、天罰から自然災害へ、啓蒙主義的な災害理解の契機となった。原発の「安全神話」が終わった今回の事故において、更なる最悪の事態が避けられたのは、神の守りであった。科学技術への過信を改め、「欲望」を抑制し、新しい生き方を始める時が来ている。この世界が経済成長なしにあり得ないなら、ここまで原発に

依存した経済を今後は脱原発に依存する経済に換えるべきであろう。教会は経済成長なしの「幸福」を証しするべきであらう。

第二に、関東大震災は国民精神の作興を進める契機となり、続く戦争の時代を準備したと言われる⁽²⁸⁾。鈴木範久は言う。「関東大震災を契機に国家による国民教化の方向が強くなり打ち出され、それに対して日本のキリスト教界が、組織を強化して協力姿勢をとっていることです」。東日本大震災からの復興のあり方は、今後の日本の民主主義とも関わることである。原発事故における情報隠し、日の丸・君が代強制条例を看過してはいけなしいし、原発避難者や原発労働者を「犠牲」としてはいけない。

第三に、東北の教会との連帯である。グローバル化する世界における人口の都市集中は、日本においても顕著である⁽²⁹⁾。現在、大都市にグローバルな世界を背景とする活発な教会が生まれる一方で、地方の教会との格差は広がりがつつある。そんな中で、東北の被災地の教会が地域に根ざして教会を形成することは、大きな希望であり、明治以来の宣教のあり方に対する問い直しでもある。日本の近代化と共に上昇志向で歩んだ日本のキリスト教がなし得なかつた歴史的な課題への挑戦であるとも言えよう。この一年、被災地支援で証された教会の世界的ネットワーク、教派を越えた協力と、行政による支援の及ばない人々への教会らしい支援の輪の広がりは注目に値する。震災の痛みと復興に向けての労苦を地域の人々と共にする教会は、神の国のリアリティーをもって日本宣教を進めていると言える。また、そこに協力させていただく日本の教会は、自らが進められた地域に向き合う姿勢を新たにし、支援以上に励ましを受けている。

「これからの一〇〇〇年を見据える」ために一〇〇〇年、四〇〇〇年を振り返ったこの講演を締め括るにあたり、四〇〇〇年前の殉教者たちの忍耐と信仰を誇りとし、農漁村のごく普通の日本人にキリスト教の信仰を根付かせようとしたニコライのように、山浦玄嗣のように、地域に根ざし遠くを見据えて歩みたいものである。将来に禍根を残す技術ではなく、水沢の寿庵堰のような未来に豊饒をもたらす技術への転換を図りたい。その昔、宮沢賢治は、心象世界における理想郷

を岩手に重ね、遠くイーハートープを夢見た。私たちは、みこころが成るところの天の都を自当てとして東北再生をめざしたい。この一年、主は東北の教会の叫びを聞かれ、御業を為してくださった。そうした東北の諸教会と共に歩むことは、日本の教会の再生にもつながることであろう。

注

*この注は英語版読者を意識して付されています。

- (1) キリシタン (Christao) は、一六世紀から明治期初頭までの日本におけるカトリックを表す術語。
- (2) ハリストス (Christos) 正教は、ロシアからもたらされたオーソドックス教会。
- (3) 伊達政宗、仙台(伊達)藩主、一五六七〜一六三七年。
- (4) L. C. Sotelo, フランシスコ会 (Ordo Fratrum Minorum) 士、一六〇三年来日、一六二四年大村で殉教。
- (5) 支倉常長、伊達政宗家臣、一五七二〜一六二二年。
- (6) 松田毅一監訳『一六一四年度日本年報』『十六・七世紀日本年報』第II期第二巻、同朋舎出版、七八頁。
- (7) 五野井隆史『人物叢書支倉常長』吉川弘文館、二〇〇三年。
- (8) 後藤寿庵、支倉の推挙で伊達政宗家臣となった。五島で受洗、洗礼名ジュアン、生没年不詳。
- (9) 一六二三年二月四日、品川で原主水、G. Angelsら五〇人が火刑にされ、弾圧激化の契機となった。
- (10) H. Clealk 監修、太田淑子編『日本史小百科キリシタン』東京堂書店、一九九九年。一六一四年から一六三九年までの殉教者は、教会の把握で宣教師一三四名、信徒一九一〇名。J. Laues は、刑死三二七二、獄死八七四の計四〇四五名。

H. Christは、推定四〇五万人とされている。一八六七年にカトリック教会は二〇五名を聖人とし、その後一六名を追加、二〇〇八年には一八八人の殉教者が列福された。

(11) 岐部ペトロ、イエズス会士、一五八七〜一六三九年。岐部ノ処刑にあたり宗門改役の井上筑後守政重は記した。「キベヘイ トロは転び申さず候ツルシ殺され候同宿ども勸め候ゆえキベを殺し申し候由」。

(12) カトリックは布教、プロテスタントは伝道、正教会は伝教と言う。それぞれのニュアンスが面白い。

(13) Nikolai, 本名 Ioan Demitrovich Kasatkin, 一八三六〜一九一二年。一九〇六年日本大主教。

(14) 中村健之介監訳『宣教師ニコライの全日記』(全九巻、教文館、二〇〇七年)は、一八七〇年から一九一一年までの日記で、東北伝教の記録も多い。

(15) 沢辺琢磨、ハリストス正教会最初の日本人司祭、土佐出身で坂本竜馬の従弟、一八三五〜一九一三年。

(16) 中村健之介編訳『ニコライの日記(上)』岩波文庫、二〇一一年、二九五〜二九七頁(一八八六年一月三〇日)。

「本当のキリスト教は、へりくだりの心をもって、真に靈的な永遠の目的のために採り入れられなければならないものだ。『へりくだり』『靈的目的』『永遠の救い』、これらのことは日本をつかさどる人びとの頭にはまったく入っていない。(中略) そんな者たちに正教がわかるだろうか。だから、日本に正教が導入されることにならないからといって、腹を立てたり、興奮したり、くやしがりたりすることはしないのだ。祈ることだ。いつもと変わらない自分の祈りを捧げることだ。そして、たゆまず働くことだ」(同上、二八四〜二八五頁。一八八五年一月三日)。

(17) 会津藩、庄内藩とこれに協力する奥羽越列藩同盟。三藩は新政府軍に切り崩され、会津戦争(一八六八年六月一〇日〜二月六日)、函館戦争(一八六八年二月四日〜一八六九年六月二七日)において新政府軍に敗れた。

(18) 植村正久、一八五八〜一九二五年、日本プロテスタントの中枢、日本基督教会(長老教会)の中心的指導者。

(19) 本多庸一、一八四八〜一九二二年。庄内藩と戦った同志、菊池九郎も信徒となり国会議員、弘前市長。

(20) 山路愛山『基督教評論』一九〇六年。岩波文庫版(一九六六年)二五頁。井深梶之助は戊辰戦争後、横浜遊学を命じられ、のち明治学院を設立する。押川方義は日本基督一致教会の宮城中会と東北学院を設立する。

(21) 国立歴史民俗博物館「ハリストス正教会・自由民権・開化万華鏡」(展示史料)。

(22) 戦時下に合同した日本基督教団の教会と伝道所は、一九四八年の統計によると青森九、岩手一四、宮城三三、秋田一〇、

山形一八、福島三二、計一一五(全国比九・一%)、聖公会一六(七・二%)、その他二〇(六%)、プロテスタント計一五一、カトリック二八(九・二%)、ハリストス正教五〇(三四・五%)であった(『キリスト教年鑑』キリスト新聞社、一九四八年。統計は一九四八年五月一〇日現在)。

(23) 日本基督教団の教会数は、青森二二(その他五四)、岩手二〇(三五)、宮城三二(二〇〇)、秋田一七(三五)、山形一六(五二)、福島四一(九七)、計一四八(全国比八・七%)、その他のプロテスタント三七三(六・三%)。聖公会二七(九%)、カトリック六四(七九%)、ハリストス正教会二三(三四%)。プロテスタントは教会インフォメーションサービスの二〇一〇年統計、カトリックと正教会は『キリスト教年鑑』二〇一一年による。

(24) 日本基督教団以外で多いのは、保守バプテスト同盟五六(山形二〇、宮城一六、福島一〇)、ルーテル同胞教団二一(秋田一二)、バプテスト連盟一八、日本キリスト改革派教会一五、日本同盟基督教団一四などであり、単立教会は三二である。青森の福音キリスト教会連合九、福島の日本イエス・キリスト教団九なども特徴的である。

(25) 赤坂憲雄・小熊英二・山内明美『東北』再生』イースト・プレス、二〇一一年七月二五日、一五頁。

(26) 高橋哲哉『犠牲のシステム 福島・沖縄』集英社新書、二〇一二年一月二二日、二二六頁。高橋は『国家と犠牲』(NHKブックス、二〇〇五年)以来、本書においてもキリスト教思想における「犠牲」の問題を批判的に取り上げている。プロテスタントの立場から言えば、唯一の犠牲としてキリストを捉えることで、他の犠牲に依拠する誘惑を退けるべきである。

(27) 山折哲雄・赤坂憲雄『反欲望の時代へ大震災の惨禍を越えて』東海大学出版会、二〇一二年九月一日、四六頁。

(28) 鈴木範久『関東大震災と日本のキリスト教と内村鑑三』福音と世界』新教出版社、二〇一二年二月号。

(29) 世界の都市人口の比率は、一九〇〇年一三%、一九五〇年二九%、二〇〇五年四九%。日本では、一九四五年二八%、一九七〇年七二%。小熊英二、前掲『東北』再生』、五〇〜五一頁。

神に迫られた改革——日本を神学する

大木英夫

1. 行く先不明の出エジプト

一年前の三・一一の東京の夜は、至る所交通渋滞、また都心から脱出 (escape) の行列が一晩中路上に溢れていた。そこには、出エジプト記の「火の柱」も「雲の柱」もなかった。「日本はどうなるか、人間はどこへ行くのか」という問いがのたうつような行列光景であった。

しかし、こんな大地震は東京では二度目であった、今から八九年も昔一九二三年九月一日の関東大震災、そのときの東京の惨状は、原爆下のヒロシマ・ナガサキに勝るほどの大崩壊であった。死者行方不明合わせて一〇万五〇〇〇、被災者総数一九〇万という記録を残した。この関東大震災の直前までの日本は、日清・日露の戦争に勝利し、第一次世界大戦は英仏米連合側で戦い、繁栄の大正リベラリズム時代を享受してきた。しかし、新興日本を支えてきた日英同盟は廃止 (一九二二)、一九二三 (大正二二) 年八月一七日に失効、そしてそのわずか一五日後、関東大震災は東京を惨憺たる情景と化した。——金子みすゞの詩が残っている。「去年のけふは今ごろは、／私は積木をしました。／積木の城はがらりと、／見るまに崩れて散りました。／去年のけふの、夕方は、／芝生のうへに居りました。／黒い火事

雲こはいけど、／母さんお腫おめがありました。／去年のけふが暮れてから、／せんのお家は焼けました。／あの日届いた洋服も、／積木の城も焼けました。／去年のけふの夜更けて、／火の色映る雲の間に、／しろい月かげ見たときも、／母さん抱いてて呉れました。／お衣おべもみんなあたらしい、／お家もとうに建つたけど、あの日の母さんかへらない。／今年ささびしくなりました。」⁽¹⁾——この女性詩人はやがて自殺した。——この東京潰滅から十年後の一九三三年、当時常任理事国の日本は国際連盟脱退、その同じ年台頭したヒトラーのドイツと結託、枢軸同盟を結び、そしてあの惨憺たる一九四五年八月一日へと行く運命の舵を切つて行つた。⁽²⁾

この度の東日本大震災は、すぐ広く世界中へ報道された。災害の巨大さの中、閃くような二つの言葉であつた。ひとつは南三陸町役場の女性職員遠藤未希さんという若い女性が、職場を離れずマイクを手放すことなく避難を呼び続け、そして彼女は巨大なツナミにさらわれて行つた殉職のこと、もう一つは或る有名な仏教学者が、大震災の残した惨状を「賽の河原」という仏教的言葉で言い現したことであつた。どちらも死の問題である。仏教的人生観は「生老病死」、しかし「賽の河原」から向こう岸へ渡れない。ニーチェの永劫回帰も同様であろう。しかし、遠藤未希の「未希」は「未来の希望」、「希望」(信仰・希望・愛)、この人のキリスト教との関係の有無はともかく、キリスト教的言葉である。

遠藤未希さんの死とは何か。旧約のエゼキエル書は、神が、エゼキエルにこう問うたと書いてある。「人の子よ、これらの骨は、生き返ることができぬのか」。預言者エゼキエルは神の前(coram Deo)に出で立つ。「出で立つ」(existere)とは、語義的にはハイデガーの言う「自己自身の外に立つこと(sich vorweg sein)」である。未希さんの死をエゼキエル書が解明する。未希さんの「死」は「生老病死」のような行き止まりではない。エゼキエルは、それを神に問うた。それは未希さんの「未来の希望」に関わる答えである。エゼキエルに神は、「それゆえ彼らに預言して言え。主なる神はこう言われる、わが民よ、見よ、わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓からとりあげて、イスラエルの地にはいらせる。わが民よ、わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓からとりあげる時、あなたが

たは、わたしが主であることを悟る」(三七・二二―二三、口語訳、以下同様)。——遠藤未希さんの死は、永遠の命をもっている。死滅か、「賽の河原」か、そうではなく永遠の命か。そのことが決着され覚悟される時に、この日本の深く内面からの転回が始まるのではないか。

2. 関東(東京)大震災(一九二三・九・一)後から第二次大戦後までの日本の神学問題

日本のプロテスタントはアメリカ・プロテスタント諸教派の伝道によつて成立した。それを代表するのは、内村鑑三であると言つてよい。彼の信仰思想は、その墓銘碑によく現れ出ている。「For Japan, Japan for the World, The World for Christ, And All for God!」

日本プロテスタンティズムの問題は、関東(東京)大震災後間もなく内村はじめ明治初期のプロテスタント指導者たちが世を去つた後、そして日本の軍国主義化への大きな転換を始めたことによつて露わとなつた。ちょうど関東大震災の頃、ヨーロッパでは第一次大戦後、神学者カール・バルトが台頭した。知的な日本プロテスタント牧師・信徒はバルト神学に傾倒した。一九三三年、ヒトラー台頭後、日本のプロテスタントに奇妙な現象が起こつた。まさにその一九三三年、バルトは『今日の神学的実存』をもつて、ヒトラーと結びつく「ドイツ的キリスト者」と対立した。ところが、奇妙な現象が現れた。「何事もなかつたかのごとく」というバルトの言葉を用いて、日曜日の教会はいわば精神のカタコンベの中で垂直次元の礼拝を守る、そして週日には軍国主義日本の中で国策に従わざるを得ない。このような二面性は、バルト神学的「超越」の悪用なしにはできないことであつた。大洋の島国日本からの亡命は不可能であつた。軍国主義的国策への順応となつた。やがてアメリカのミッシェンとの関係は断ち切れ、諸教派は一九四一年「日

本基督教団」へと合併統合された。

日本のバルティアンは、戦中・戦後「何事もなかったかの如く」を合言葉にバルト神学に執着し、その傾倒は敗戦後も引き続く。むしろ敗戦後バルト神学への傾倒はさらに深まり、日本ではあの巨大なバルトの『教会教義学』全巻の翻訳さえ果たされた。⁽³⁾

第二次大戦後の二年目にアムステルダムで開催された世界教会会議は、「世界の無秩序と神の計画」という主題で行われた。バルトはこの題に真つ向から反論、「まず神の国と神の義を求めよ」との聖句により、題名の上下逆転を要求した。そこにバルト的垂直次元が戦後も明確に見えた。ニーバーは、それに対して「われわれは人であつて神ではない」という再逆転をもつて反論した。水平次元と歴史次元を意味する。⁽⁴⁾その後『クリスチャン・センチュリ』誌上でのバルトとニーバーの論争となつた。⁽⁵⁾ニーバーはその論争後 *Faith and History* を出版（一九四九）、「歴史」の水平次元に目を向けた。ニーバーのバルト批判は、垂直次元から水平次元への神学的転向の出発点となるべき対決であつた。ヨーロッパではボンヘッファーは戦時中、戦後はモルトマンが、バルトとは違う方向を示した。

戦後は既に本基督教団から戦前の旧教派に戻つてアメリカの母教派との関係を取り戻す動きがあり、残存した日本基督教団は、遅れ馳せの一、九六七年「戦争責任告白」を本基督教団議長個人名で出した。それは当時の教団の指導的牧師・信徒の間には東西対立におけるバルトの東への傾きの影響を受け、ロマドカ指導のプラーハ平和会議との連携をもつて、一種の左傾反米をひき起こした。バルトは、ソ連軍プラーハ侵攻の報を聞きながら死んだ。

3. この東日本大震災に至る日本の神学状況——グローバルゼーションと終末論

東日本大震災の状況を旧来のバルト的垂直次元の発想では捉えることはできない。巨大なツナミは、原発をはじめ近代文明の垂直次元を押し倒し、押し流した。「地の基ふるい動く」、垂直次元の文明（バベルの塔を思い出す）をすべて押し倒す激震が、何を呼び覚ましたか。グローバルが——自転公転ではない——「転開」してグロ、ロ、バ、ラ、イ、ズする、「グローバルゼーション」という過去二十年の間に発生した新しい言葉、地球の未来志向的「転開」が、いたるところ現代世界を押し流し流しだした。現代知性はそれをどう捉えるか。この現状を神学的に捉え直すことは、まず神学自体の改革がなければならぬのではないか。

或る年わたしは、或る出版社から『バルト』という書の著作を依頼された。バルトの書齋にはコルマールの美術館にあるグリユーネヴァルトの有名な十字架像の小型のものが飾つてあつた。わたしはしかし、パーゼルの美術館でホルバインの『墓に横たわるキリスト』を見たとき⁽⁶⁾ 圧倒された。その時から、バルトの垂直次元の神学とは異なる、「水平次元」の神学的開示を受けたような思いであつた。

以前からわたしは、レーヴィットが「世界史」という概念は、本来救済史（Heilsgeschichte）に由来するものだと言つたことに啓発されていた。⁽⁷⁾ 仏教的人生観は「生老病死」、その世界観はニーチェ的永劫回帰から超脱できない。しかし、ホルバインの描く「土曜日のキリスト」は、未来への直線方向へ横たわり、そして救済に不可欠な「古い人から新しい人へ」の「転回／移行」を導く！

カントの後、ヘーゲルは「有（Sein）—無（Nichts）—成（Werden）」という弁証法的論理を発見した。しかし、「土曜

日のキリスト」に体现された論理は、それとも違つ、それは「無(Nichts)―成(Werden)―有(Sein)」、死を越えて復活と永遠の生命へと成り、動く。本来の人間存在／有(Sein)とは、洗礼における「死んで生きる」の「新しい存在」への動き、「成(Werden)」として体験されるのではないか。人間実存の内面／外面に動くパニヤンの「前進」(Pilgrim's Progress)⁽⁶⁾への動き、その前進の究極は、この土曜日のキリストによつて復活へと新生の動きである。もしそこにキリストが横たわつて居なければ、死はあの自殺者イスカリオテのユダのアケルダマへの墜落となるであろう。パウロはなぜ「わが生くるはキリスト、死もまたわが益」と言うか。キリストに在つて死し生、新生へ転向があるからではないか。洗礼も聖餐も、そのようにしてサクラメンタルなのである。向こう岸、復活の日曜日へと渡るこの「土曜日のキリスト」の横倒しの人柱の「無―成―有」の動きに運ばれて、救済の動きを体験・実感するのである。パウロの文書は、それを体験し実感をもつて書かれた。⁽¹⁰⁾——この「土曜日のキリスト」、横倒しの人柱は、世界史の中に横たわる救済史の次元を開示する。枯れ骨の谷を「見よ！」と言われた。しかし、この預言者は死者の中に自分をも見た。

なぜキリストは陰府の深みに橋のように横たわり、そしてあたかも「渡れ！」と励ますように目を開き口をあけているのだろうか。⁽¹¹⁾あの十字架から復活へのただ一日だけなのか。そうではない。「主にあつては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである」(IIペテロ三・八)。あの土曜日の一日、それは千年でもあり、いや、世の終わりまでも、動き続けているのではないか、——(悪い譬えかもしれないが)あたかも電動エスカレーターのように！——このキリストによつて救済史(Heilsgeschichte)の「方向と線」が決定されている！第一次・第二次大戦から始まつた「転回／転開」とは何か、それは、永劫回帰的回転の地球儀的グローブが、直線の未来方向へ「転開」(つまりグローバリゼーションの動き)へと直線コースに入つたことと感覚であり、その方向と線は、レーヴィットが言う聖書的な創世記から黙示録に至る救済史的直線なのではないか。それは終末論的未来へ向かう。バルト的垂直次元の現在終末論から、今やニーバーの水平次元に関わる歴史社会的神学へと新しい関わり、あるいは新しい関係づけをもたねばなら

くなっているのではないか。

4. 新しい未来へのエクソダス

東京下町に世界一高いというスカイツリー・タワーが完成する。日本古代五重塔の「心柱」工法を近代的に生かして用いた成果である。ところで、敗戦の年一九四五年三月一〇日その地はまさに「賽の河原」であつたのだ。⁽¹²⁾この大震災後の日本の再構築には、タテの心柱ではない、そうではなく、ヨコ、の心柱が必要ではないか。あのホルバインの「土曜日のキリスト」は、金曜日から日曜日の中の土曜日の深い淵の中に横たわる。キリストは、救済論 (Soteriology) ではなく、救済史 (Heilsgeschichte) の本質を開示する。——仏教の「生老病死」、哲学者ニーチェの「神の死」の哲学の閉塞的円環を打ち開いて、世界をそして人間を直線化する。未来志向・新形成へと導く。人間の存在 (Sein) とは無⁽¹³⁾↓成↓有、⁽¹⁴⁾「新しい存在」(テイリッヒの言う“New Being”) というよりは、むしろ「実存」(“Existenz”外へ出て立つ)、それがキリスト教的実存ではないか。ボンヘッファーの言う“Nachfolge”、キリストに従う、未来へ向かつて動き出す、現状に諦念せず停滞せず、出立 (exodus) するのである。バニヤンの「ビルグリムズ・プログレス!」、パウロは言う、「いつもイエスの死をこの身に負っている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。……それはイエスのいのちが、わたしたちの死ぬべき肉体に現れるためである」(II コリ四：一〇以下)。「土曜日のキリスト」という橋上でわれわれはその言葉を獲得するのである。ボンヘッファーが「キリスト教の深い此岸性⁽¹⁵⁾」と言つたのは、この深い淵の中に横たわる「土曜日のキリスト」によつて十字架から復活へと渡る体験を言っているのではないか。そこには「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従つてきなさい。自

分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、何の得になろうか」(マルコ八・三四以下)というキリストの言葉は、ボンヘッファーの「Nachfolge」を導く。その聖土曜日(の)のキリストが、現代の「火の柱・雲の柱」、世界史の中を貫く心柱・救済史である。

プロテスタントイザムの「出立」とは何か。バニヤンの同時代人ミルトンは、「宗教改革を改革する」(reforming of Reformation itself)ことを言った。それはヨーロッパ大陸では、ウエストファリア条約で地理的(空間的)区分をもつて宗教改革後の諸派分裂を治める同時期であった。こうしてプロテスタントイザムは空間的に定着し、バニヤンの前進を失ったのではないか。「イエスはなお先に進み行かれる」(ルカ二四・二八)、われわれは遅れているのではないか。今われわれに求められているのは「出立」ではないか。グローバライズして終末論的未來へと転向して行く。その中でプロテスタント・キリスト教は「たえず改革されて行く教会」"Ecclesia semper reformanda"で前進せねばならないはずである。そしてその現代のグローバリゼーション動向の道先案内をせねばならないのではないか。わたしは、この大震災は、戦後日本のプロテスタント諸派をその根底から揺さぶる「神の改革の迫り」を感じてやまないのである。わたしは、ここで「日本の神学」は日本の神学ではない、日本を神学することだという題を出した。ミルトンは『アレオパギティカ』(二六四四)で、古代エジプトのオシリス神話を引いてこんなことを書いた。反乱によって死体はバラバラに吹き飛ばされた王の遺体の断片を妃イシスは「野を越え山を越え探した」、そして「真理の主の再臨までは全部見つけられないだろうが」と注釈した。——今や、大震災に揺さぶられて、われわれはなにか巨大な課題を神から与えられたのではないかと思う。そのような苦悩の中の日本に、太平洋を越えてここに来てくださったアメリカのかたがたに、日本に古くから伝わった中国の孔子の言葉「朋あり遠方より来る、亦樂しからずや」をもつて、心から感謝と歓迎の意を表したい。

注

(1) 金子みすゞ「去年のけふ——大震記念日に——」『空のかあさま』、新装版金子みすゞ全集・II、JULIA出版局、一九八四年、二六一—二七頁。

(2) 一九二六年日本は大正から昭和へ、そして一九三一年満州国成立、大陸進出に活路を求め、その後リットン調査団の報告が国際連盟に提出、日本は孤立、当時連盟常任理事国であった日本の代表松岡洋右（アメリカ育ちのキリスト者）は、「かつて『狂ヘル輿論』がキリストを十字架にかけたように、現在の輿論も日本を十字架にかけようとしているが、誤った輿論は数年のうちに必ず変化するであろう」と述べ壇上から下りた。——その問題を巡って、アメリカでは、ラインホルド・ニーバーと弟リチャード・ニーバーとの論争があつた。リチャードは日本の満州国問題に関して、「何もしない不干渉の美德」を主張し、兄ラインホルドはそれに反対した。

(3) バルトの『教会教義学』の全訳は英仏訳と並んで日本は世界で三番目である。しかしこのような事態に至るのは、日本の明治憲法制定以来の（わたしがルターの『教会のバビロン捕囚』をもじつて言う）『ゲルマン捕囚』の結果であつた。

(4) Carl Michelson, *The Hinge of History* (1959) は実存と歴史の関わりに視線を向けたもので、当時の論題に触れている。

(5) バルトの垂直次元が歴史的現実と接する接点に方向性を与える試みは、バルト自身戦後のたとえば「キリスト者共同体と市民共同体」（一九三八／一九四六、二九節参照）になつてようやく言及されたが、第二次大戦後のスターリン讚美、イギリス・アメリカのデモクラシーとフランスのデモクラシーの区別がつかないなど、バルト神学の思わぬ問題性を露呈した。バルトには、リンゼイが指摘した東と西のデモクラシーの違いの識別ができなかった。Cf. Woodhouse, *Puritanism and Liberty*, Postscript to the 1950 edition.

(6) ホルバインが描く「土曜日」のキリスト」とは、黄泉の深い淵に架けられた橋、横の「人柱」ではないか。これを見たドストエーフスキイが『白痴』に書き記したことで知られる。ただわたしはドストエーフスキイとは別様に見た。

- (7) Cf. Karl Loewit, *Weltgeschichte und Heilsgeschichte* —レーヴィット自身はしかしニーチェに回帰した。
- (8) 「新しい存在」というテイリッヒの概念は、われわれはテイリッヒのように存在論的ではなく「歴史」的に見る。
- (9) Cf. John Bunyan, *Pilgrim's Progress*.
- (10) ここで仏教的「生老病死」的人生観、また東日本大震災の惨状を見て「賽の河原」と言ったことに対して、使徒パウロは、それとは異質のキリスト教死生観を提示する。このパウロの言葉は、パウロの神学的実存を言い表していることと見做されるべきである。それはキリストにおいて「生」の真実が違つて現れ出る。
- (11) のちに同じ黄泉に横たわる絵を書いたが、そのキリストは目を閉じている。
- (12) 今から六七年前、あの敗戦の年、一九四五年三月一〇日、今日スカイツリーという世界一高いと誇る塔が完成間近の下町業平橋界限、その地域は、大空襲によつてまさに惨憺たる焦熱地獄と化したところであつた。
- (13) モルトマン、喜田川信、蓮見和男訳『神学の展望』新教出版社、一九七一年、五七頁。

神の時を捉える——神のわざへの参与

藤原 淳 賀

序

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。」（ヘブル一……一二。新共同訳、以下同様）

この度の東日本大震災によって日本もまた諸教会も多くの被害を受けた。しかしわれわれは、教会が既に震災前に疲弊し大変に困難な状況にあったことを知っている。われわれのゴールはただ単に二〇一一年三月一〇日の姿に教会をまた日本を回復することではない。われわれはヴィジョンを新たにし、前に向かって行かなければならない。あるいは開国以来の日本宣教それ自体の問題点を扱う必要があるであろう。あるいは日本の近代化それ自体の問題点も振り返る必要があるかもしれない。日本にはそれを踏まえた長期的なヴィジョンが必要である。しかし、今日のこのシンポジウムは、神学の専門家が様々な考察を分かち合うが、議論を戦わせるための場ではない。（それは別の場で行うのでよい。）このシンポジウムは、神学が本来、教会に仕えるものであることを再認識し、人々にわかる言葉で語り、主流派も福音

派も一緒に肩を組んで諸教会に仕え、日本にキリストを証しする兄弟姉妹として、神の御国に属する民として、前に進んでいくための場である。

神学をするのに最も相応しい場合は、象牙の塔でも図書館でもなく、礼拝の場である。私たちは祈りと讚美をもって共に主を見上げ、今日のシンポジウムを始めた。私たちはまた讚美と祈りをもって共に主を見上げこのシンポジウムを閉じていく。それは私たちが共に神の民であるということの証しである。私たちはこの会を計画するにあたり、単なるアカデミックな学者の議論に終わるのではなく、福音派も主流派もキリスト教諸団体も被災支援団体も一緒になって、太平洋を囲んだ向こう側にある敬愛する神学校と一緒に日本の諸教会に仕えたいと考えた。⁽¹⁾

この短い講演ではいくつかの提案ができるのみだが、今日の会としてはそれで十分であると考えている。このシンポジウムをきつかけとして、諸教会、諸団体が、またそのリーダーたちが共に、顔が見える信頼関係をもって歩んでいくことができるならこのシンポジウムは大きな役割を果たすことになる。

私が倫理学を初めて本格的に学んだのはキルケゴール研究者、大谷愛人教授からであった。大谷教授から学んだ重要なことの一つに、人の発言には二つの方向性しかない、ということがある。建設的に励ましよりよく建て上げる方向か、斬りつけ非難し破壊する方向の二つである。残念なことにしばしば優秀な人は剃刀のように鋭く人を切りそれで満足する。本人も周りの人もその発言がどちらのものか、だいたいわかっている。批判はたくさんあつてよい。しかしそれは建て上げ、よりよくするためのものでなければならぬ。神のために何かを試み建て上げようとしている人々がいる一方で、専ら批判と破壊に終始する人々がいることは残念である。批判に終わることなく、代案を提出し実践し始めなければならない。このことは、特に震災後の協力関係

において、また教会形成において大変に重要なことである。

「認識は、わけ知りをつくるだけであつた。わけ知りには、志がない。志がないところに、社会の前進はないのである。志というものは、現実からわすかばかり宙に浮くだけに、花がそつであるように、香かほ気がある」。日本のある作家の言葉である。

本日のテーマは「いかにしてもう一度立ち上がるか?——これからの一〇〇年を見据えて」である。皆さんは、一〇〇年後に日本のキリスト教会が、そしてこの国がどのようなようになって欲しいと願うだろうか? 一〇〇年後、今日この場に集まっているわたしたちは皆、この地上での生涯を終えているであろう。主が再臨を待たれるなら、我々はこの目で見ることが許されていない一〇〇年後の教会とこの国がどのようなことを私たちは願うであろうか? 「経済的に困難だから」、「前に試みたことはあるけれど失敗したから」、「大変そうだから」ということを言い訳にせず、もし仮に絶対に失敗しないとわかっているとするとするなら、あなたは、神に与えられている自らの生を用いて、神の栄光のために、自分たちのこの世代に何を行いたいと思われるだろうか? これが、今日私たちが問わなければならない問いである。

モーセは、約束の地を見据えて神の民を導いていった。多くの現実的な問題を抱えつつ前に進んでいった。そしてモーセはかの地を遙かに望みつつ、その生涯を終えた。ダビデは神のために神殿を建てたいと願ったが、それは許されなかった。ダビデは私財を投げ打ち、神殿建設を夢見つつ、次世代のためのプランと資材を準備をし、その波乱万丈の生涯を終えた。彼らは、全ての結果を自分の目で見られなくても、自分の手で達成できなくても、神の御名が崇められ

るなら、次の世代の人々が神と共に歩むことができるなら、満足することのできたリーダーであった。

主にある兄弟姉妹、私たちは、次の世代が、そして更にその次の世代がどのようになっている姿を見たいであろうか。この問いは、われわれの背筋をまつずぐにする。そしてわれわれの目を上へとあげ、われわれの思いが神の思いと重なるように求めることを求める。日本の国も教会も多くの問題を抱えている。歴史に根ざした深い悔い改めも起こらなければならぬであろう。それらを踏まえた上で、しかしながら、私たちは、神が地の基が震い動くことを許された、この時を捉え、教会が向かっていくべき地を見据え、私たちに託されたこの時代を共に進んでいかなければならぬ。

世界の中で最も大きな二〇一一年のニュースは日本の東日本大震災であると報じられた。しかし、世界広しといえども、数ある神学校、大学神学部の中で、日本の諸教会に仕えるためにとコンタクトを取り、実際にこのように来てくださったのはフラース学校のみである。私たちは、この一点をもつて、フラース学校に心からの感謝を申し上げなければならぬ。またフラース学校は、外国の神学校として、日本への押しつけとなることなく自らが全面に出ることなく協から日本の諸教会を支えたいと、あくまでも「共催」という立場を取られた。この配慮にも感謝を申し上げたい。

1. 現在の「時」を見極める⁽³⁾

リスボン地震（一七五五）以降、われわれは地震を単純に神の裁きと考えることはなくなった。⁽⁴⁾むしろこの自然災害の中で（そしてそれは人災を含むことになったのだが）、神が何をなさろうとしておられるのかを見なければならぬ。

われわれは歴史の中に生きている。歴史における出来事は様々な仕方では解釈されてきた。神の民の歴史解釈の特徴は、神を中心とした解釈にある。それは旧新約聖書に最も明確に見ることができる。神の民の歴史理解は、たとえば高校の世界史の教科書に見られるような視点とは大きく異なっている⁽⁵⁾。それは、中東の小国イスラエルが神の救済の歴史にかけがえのない役割を果たしていることを見る。また例えばルカ福音書は巨大な権力を持つ帝政ローマ初代皇帝アウグストゥスとベツレヘムの馬小屋に生まれた幼子を対比的に記している。この世がほとんど注意を払わなかったあの地方の誕生を世界史を揺り動かす決定的な出来事として見ている。

神の民は、神がそこにおいて何をしておられ、神の民がいかに応答してきたかを中心として歴史を見てきた。そしてわれわれは、日本においていかにその規模が小さくても、神の民の集まりである「教会」が歴史の中でどれほど重要な存在であるかを、またその教会に仕えるということがどれほど素晴らしい特権であるかを理解しなければならぬ。

A. カイロスを捉える

われわれは人生の中で重要な「時」があることを経験的に知っている。時はいつも同じ濃さで流れているわけではない。ぼんやりと流れるような時もあれば強烈に迫ってくる時もある。二〇世紀に「カイロス (kairos)」という言葉葉をわれわれに最も思い起こさせた神学者はパウル・ティリツヒであった。客観的な「時間」を表す言葉にクロノス (chronos) という言葉がある。全てのの人に共通な時計で測ることのできるような種類の時間である。それに対してカイロスとは、満ち充てる時を表す。その「時」には出会いがあり、衝撃があり、応答を我々に迫ってくる。

この度の大震災は特に日本と神の民にとって、また世界にとっても、カイロスといえよう。われわれはこの「時」を捉えなければならない。そしてこの中で働いておられる神の働きに応答していかなければならない。この

二〇二一・三・一一の出来事、またそれに対する対応は、将来の世代が必ず振り返ることになる「時」である。「あの時、日本の教会は何をしたのか、そして何をしなかつたのか」。「うちのお祖父ちゃんはその時どういうことをしていたのか」。「曾お祖母さんの教会はどういうことをしていたのか」。彼らは必ずこの問いを問うようになる。今私たちはそのような「時」に生かされていることを覚えなければならない。

神は教会の外においても働かれる。しかしそれを最もよく見きわめることができるのは、神と共に長い歴史を歩んできた神の民、教会である。真の神学は、まさに今ここにおいて神が何をしておられるのかを神の民と共に見、理解し、教会が進むべき道を指し示していかなければならない。神学の研究には過去の神学者についての歴史研究も含まれる。しかしそれは今ここにおける神のわざを知り、教会がいかに進むべきかを助けるために行うのである。神学は超越的視座を保持しつつ具体的な状況に関わっていく。永遠なる神が歴史の中に具体的に受肉されたように、神学はこの超越性と具体性の両方を、緊張感の内に持つのである。

B. 時の徴を見る

イエス・キリストは時の徴を見るようにと語られた⁽⁶⁾。

「朝には『朝焼けで雲が低いから、今日は嵐だ』と言う。このように空模様を見分けることは知っているのに、時代の、しるしは見るこゝとができないのか。」(マタイ一六・三。傍点筆者)「偽善者よ、このように空や地の模様を見分けることは知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか。」(ルカ一二・五六)

マタイ福音書において「見る」と訳されている言葉とルカ福音書において「見分ける」と訳されている言葉は異なるが、両者とも注意深く見極め正しいことを判断するという意である。⁷⁾ ルカにおいて「今の時 (καιρος τωτον)」は単数形であるが、マタイにおける「時代のしるし (σημεία τών καιρών)」は複数形であり、それは様々な具体的な天候の状態が念頭に置かれていると考えられる。

天候の見極めには多くの経験と試行錯誤があったことが前提とされている。このことが示唆するのは、われわれが先人の知恵に学びつつ、この時代における神の御心を正しく判断するということである。

またルカ福音書においてこの「今の時を見分ける」という箇所が続くのは、何が正しいかを判断し、熱心に「和解決する」ようにという教えである。和解・平和づくりは、神の御国の中心的な性質であり、現在の日本のキリスト教というコンテキストにおいても私たちが強く意識し、実践すべき内容である。

したがって私たちは、先人の知恵と共に、多くの徴候から神が何をなさっておられるのかを、常に誤る可能性を持つつつも、共に見出し応答していく必要がある。そして和解を——神と人との和解だけでなく、神の民の中における和解を、またそれ以外の人々との和解を——念頭に置いておくべきである。非の無きお方が大きな犠牲を払って罪人のもとに和解にいられた。このお方を主と呼ぶ神の民の生き方においては、この和解が規範とならなければならないであろう。

C. 神のわざへの参与——神の民として共に

「もし子供であれば、相続人でもありません。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦し

むなら、共にその栄光をも受けるからです。」(ローマ八：一七) この大震災の中で、神が、誰よりも最も心を痛めておられることを覚えなければならぬ。そして神がこの世の苦難のただ中で贖いの働きをしておられることを覚えなければならぬ。神は私たちの前を行き、私たちが神に応答しその贖いの苦難 (Redemptive Suffering) の働きに参与するように招いておられる。私たちは被災者支援においても、キリスト者としての信仰の証しにおいても、神の苦難の贖いの働きへの参与として応答しなければならぬ。

新約聖書と教会における判断の基準には、「羊が羊飼いの声を聞きとる」という確信がある。「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。」(ヨハネ一〇：二七)

このことを考えるとき、二〇世紀前半を代表するアメリカの神学者、H・リチャード・ニーバーの神学を思い起こしたい。リチャード・ニーバーの優れた点の一つは、彼が、トレルチの歴史的懐疑的相対主義を深く理解しつつもそこに留まることなく、またバルト的啓示的実存主義の重要さと危険を意識し、その両者の橋渡しを試みた点にある。⁽⁸⁾そして彼は、新しい時代のための神学的方向性を指し示したといつてよい。ニーバーは、われわれの有限性と罪にもかかわらず、神は私たちに語られ、神の民は神の御心を知り得ると考えた。⁽⁹⁾

神の民が今聞いている声は何か？ それは、「この震災を通し、諸教会が一緒に力を合わせ、肩を組んで、共に神の国の前進のために協力しなければならぬ」という声ではないだろうか。

本日、驚くほど多くの諸団体からの協賛、後援、ご出席をいただきつつ——おそらく戦後初めてといつてもよいほどの規模の多様な教会の背景の方々と共に——この会が持たれている。教派、教団の伝統はこれからも尊重されるべきである。しかし日本におけるキリスト教会として、その壁を越えた、互いの顔が見える関係づくりと実際の協力が進まな

ければならない。

思えば、私たちはキリスト教会の中に、私たちは多くの壁を作ってきた。教派の壁、教団の壁、様々なグループの壁。そして「あの人たちは一緒にやれない」という態度もあつた。しかもそれは人口のわずか1%といわれるキリスト教人口の小さな枠の中に作ってきたのである。しかもその少なからぬ部分は、私たちのプライドであつたり、偏見であつたりしたのではないだろうか。しかしこの度の大震災によつてその壁が揺れ動かされているのを多くの人々が感じている。

それは、断定的、強制的ではなく、自分たちの確信を持ちつつ「告白的なかたちで」「(神の民として) 共同体的に」見極め、対話し、前進していくこととなろう。こういった働きは統一されている必要はない。それぞれが自らの確信に留まりつつ、震災対応と今後の協力関係が多様な形でなされ、大きな一体感が持たれていくのが適切であろう。

その時私たちに必要なのはキリスト教会としての歴史的意識である。われわれに委ねられている時は二一世紀の前半である。その中で私たちは、自分たちの前にレースを走つた神の民の諸先輩の方々のことを覚えなければならない。旧新約聖書において、困難な中、神の御心を求めてこられた方々。二〇〇〇年に亘るキリスト教史において自分たちの時代のレースを走り切つた方々。そしてキリシタンをはじめとしてこの国において神に仕えてきた方々。私たちは、彼らのことを思い起こさなければならない。そのバトンを、私たちはこの国において今、受け取つているのである。

そしてまた私たちは、後に続く世代のことに思いを馳せなければならない。少なくとも一〇〇年先を見据え、未だ見ぬ彼らに恥ずかしくない走りを今この時代にしなければならぬ。われわれは過去に生きた神の民を覚え、将来の世代のことを考えつつ、今ここにおいて、神と共に、また主にある兄弟姉妹と共に勇気を持つて決断をするのである。

更に今ここにおけるわれわれの生き方は、天の御国の前味となる必要がある。それは、イエス・キリストに最も明確に現れた神の国の性質を反映したものでなければならぬ。我々の復興支援も、それ自体、特殊なものとしてではなく、御国に向かつて進んでいく流れの中で位置づけられるものでなければならぬ。

2. キリスト教と日本との第四の出会いのために

日本は大きく分けてキリスト教との出会いを三度経験してきている。フランシスコ・ザビエルに始まる一六世紀のローマ・カトリック宣教、一九世紀の開国時から始まるプロテスタント、カトリック、そして正教会による宣教、そして二〇世紀の敗戦時からの宣教である。実は、そこには共通のパターンが見られる。これらはいずれも日本の混乱期であった。そして日本は初めキリスト教に関心を持ち、受け入れていく。しかし国が落ち着いてくるにつれてキリスト教から離れていく。もはやキリスト教を必要としなくなるのである。特に最初の二つの出会いにおいて、それは顕著に見られた。

戦国時代には信長の好意的な待遇もありキリシタンの数はかなりの勢いで増えていった。しかし全国統一が見えてくると秀吉は伴天連追放令（一五八七）を出し、日本は禁教の方向へと向かっていった。そしてついには日本は鎖国してキリスト教を締め出した。

一九世紀に日本が開国したとき、宣教師たちは鎖国の経緯を知っており注意深くアプローチした。キリスト教は西洋のキリスト教文明と共に日本に入ってきた。日本ではキリスト教を大きく歓迎する時期もあり、多くの教会やミッションスクールが作ら

れた。

一九世紀以降、世界のいたるところでナショナリズムが高まった。米國や韓國のようにナショナリズムとキリスト教が手を携える場合もあるが（そしてそれも大きな問題なのだ）、日本のナショナリズムは反キリスト教的に働く。日本人であることとキリスト者であることとの間には相克があつた。この日本のナショナリズムの中でキリスト教は迫害された。

敗戦と共にキリスト教は大変な勢いで日本に入つてきた。キリスト教ブームと呼ばれる時期には教会に人が溢れた。ある種デモニックになつた國家神道を中心に据えて無惨な敗戦を経験した日本にはキリスト教に対する大きな期待があつた。しかし日本が奇跡的な經濟復興を経験していく中、人々は潮が引くように教会を去つていった。日本は、キリスト教がなくても十分にやつていくことができると考えた。そしてキリスト教人口は未だに一%なのである。

しかしもし、今この「時」、日本の諸教会が、フラー神学校をはじめとした諸外國の兄弟姉妹と共に協力關係を持ち、信賴關係を持ち、キリストを証しする歩みをするなら、日本とキリスト教の第四の、そして今度こそ実りある、出会いとなる可能性がある。私たちはそのような時代にバトンを渡されているのである。

ではこの時代に私たちがしなければならぬこととは何であろうか？

A. 教会が教会となる

教会は信仰者の共同体という本来の姿を確認しなければならない。

緊急時に必要とされる物資の供給は行政も市民団体もキリスト教会も変わらない。震災直後から日本のキリスト教諸団体、各教派、各教会が各々その働きを行つてきた。しかしこれからの中期・長期的なキリスト教の支援における神の

民としての独自性を確認しなければならない。

私たちが覚えなければならないこと、それは教会は長い間教会以外のものにならうとしてきたということである。教会は市役所でも公民館でも社交クラブでも音楽ホールでもない。教会は教会とならなければならない。実はそれが、教会が社会に対してできる最も大切な奉仕なのである。

四世紀以降、教会は国家教会として行政に組み込まれていった。生まれた子どもに洗礼を授け、村の結婚式や葬儀を担当してきた。教会は長い間、郵便局が通信部門を担い、軍隊が防衛部門を担うように、国の宗教部門・道徳部門を担う機関と考えられてきた。

しかし幸いにして日本の教会は、四世紀までの教会本来の姿と同様、信仰者からなる教会（ピリーバーズ・チャーチ）に近い。キリシタン時代のキリスト教も、迫害下、信仰へのコミットメントという意味において、ピリーバーズ・チャーチに近い性質があった。しかしながら日本の教会は、国教的キリスト教の残像を憧れを持って無意識のうちに求めていると私は見ている。街の中心にあつて社会に一目置かれる教会。パイプオルガンとステンドグラスのある「立派な」大聖堂。行政と一緒に働く教会。教員に政治家のいる教会。これで教会の影響力が増し、ステータスが上がりと思っている人たちもいる。「教会本来の姿」という言葉をもって、中世や近代の「キリスト教社会」の中心にある教会を指している人もいる。しかしナザレのイエスはそのような方向性は求めなかった。新約聖書の教会もそのような「影響力」を求めてはいない。彼らが第一に求めたのはキリストの弟子として「神に誠実である」ということであり、彼らを通して神が働かれることであつた。

戦後のキリスト教ブームでは人々は教会に押し寄せた。教会には希望があるように見え、また物資もあつた。多くの宣教師も送られてきた。しかし人々は潮が引くように教会から去つていった。豊かになつた日本はキリスト教を必要と

しなくなつていったのである。教会側でも紛争の痛みを経験した。教会は眞の希望と和解と平和を作り出す新しい生き方を十分に提供できなかった。

大震災後の支援で教会は多くの物資を配つてきた。海外のキリスト教諸団体からの大きな援助も助けとなつた。しかしこの中でわれわれは戦後のキリスト教ブームのようにならないように気をつけなければならない。人々は波のように教会に押し寄せて来たかもしれない。しかし商店が再開し、日常の生活に戻つていく中で潮が引くように去つていくかもしれない。新しい町づくりをはじめとして、教会は積極的に社会に関わつていく必要がある。しかし教会は、まず何よりも教会とならなければならない。

人々の魂を貫き、根本から生が変革される福音を教会が生きていなければならない。そしてその交わりを人々に提供し、またお招きするのである。そのためには教会が神に触れられ、砕かれ、変革され、新しい神の国のリアリティーを生き続けていなければならない (*Ecclesia semper reformanda est*)。

B. 苦難の理解——勝ち組へのキリスト教を越えて

「日本が世界の勝ち組に入るには、キリスト教が必要だ」。そのような伝道が明治期からなされてきた。日本のプロテスタント伝道を振り返ると、人々は都合がよい時には教会に来るが、キリスト者であることが困難な時代になると教会を去つていくというパターンが見られる。

結局のところどこまで福音が魂を貫いていたのだろうか。

人々の生の根本が何に繋がっているか、それが見えてくるのは、嵐の中で根元の砂が風に飛ばされ波に洗われる時である。一六一―一七世紀のカトリック宣教では多くの殉教者が出た。しかし開国後のプロテスタント宣教は、困難な時代もあったがほとんど殉教者を出さなかった。キリシタンの時とは時代が違うというかもしれないが、韓国のプロテスタント教会は、同じ日本政府のもとで、多くの殉教者を生み出している。

日本のプロテスタンティズムに著しく欠けているのは「苦難」の積極的理解である。北森嘉蔵の「神の痛みの神学」があったにもかかわらず、また戦後、世界的規模で苦難の神学的理解が大きく発展したにもかかわらず、日本のキリスト教ではこの問題を軽視してきた。

殉教の話になると、「そこまで行かなくても、神様は私たちの弱さを神は受け入れてくださる」となる。あるいは、「むしろ殉教が起こらないで済む社会を作り上げていかなければならない」という話題へと上手に問題をすり替える。正面から苦難の問題に向かわず、上手にかわそうとする。しかし苦難を語らないキリスト教はまやかしといつてよい。鞭打たれ、十字架に付けられたあのお方を「主」と呼ぶなら、そしてあのお方が、自分の十字架を追ってついて来なさいと語られたのなら、私たちは苦難の問題を避けることはできない。

大災害の中で、多くの人々が当然のようにお金や物資を送ってきた。被災地との関わりには犠牲が伴うことを当然のこととして受け止めている。教会は神のわざとの関わりにおいて犠牲の問題を明確にしていくとき、キリストの苦難を身に帯びて継続的にその働きをしていくことができるだろう。そしてその中で神の復活の力を経験させていただくことができるであろう。

C. 神の国の先取りとしての教会——教派間の壁と日本のナショナルリズムを越えて

日本のキリスト教人口は1%といわれて久しい。しかも私たちはその1%の中に多くの壁を作ってきた。しかし今回の震災支援でその壁は揺り動かされつつある。同じ教派、教団の被災教会を優先して助けるのは当然であるが、それを越えた支援の働きが早くから起こっている。この働きは意識して支えていかなければならない。自分たちの教団の被災した教会堂の修理が終わった時、とりあえず働きが終わったと考えるかもしれない。しかしそうではない。われわれのゴールはそこではないのである。日本がキリストに出会うことができるように関わり、証しをしていかなければならないのである。

もし教会が互いを尊重し愛をもって復興の業に関わっていくなら、人々はそのうちにキリストを見るであろう。キリストの弟子の第一の特徴は、早く多くの物資を届けることでも、大規模で煌びやかな伝道集会を持つことでもなく、有難い政治家を送り出すことでもなく、キリストが愛されたように互いに愛し合った生き方をしていることである。「あなたがたに新しい錠を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」

(ヨハネ一三：三三—三五)

神は、被災地のために日本の諸教会がこの時を捉え、自分たちの小さな壁を越えて共に声を掛け合い、支え合い、愛をもって協力する姿を見たいと願っておられるであろう。そして世界の諸教会がこの働きに日本の諸教会と共に関わって、人を送り、継続的に訪問し、教会を励まし、共に神の国の民として生きる姿を見たいと願っておられるであろう。

諸外国の教会や宣教師たちには言葉の壁がある。しかし彼らをお招きして共に主の僕として働きたいと思う。震災直

後から彼らは勇敢に被災地に向かつて行つたことを決して忘れてはならない。

海外のメディアによつて、困難な中で日本人の忍耐強さが賞賛を受けた。しかしそれは日本のナシヨナリズムに火をつける可能性もある。日本人自身からも「日本ならやれる」、「日本人はまた復興できる」といった声をよく聞いた。これが日本の傲慢なプライドへと向かわないように祈る。

また日本のナシヨナリズムやプライドが海外の教会と日本の教会との壁にならないように気をつけたい。そして、未だ完成していないが既にキリストによつて始められた神の国の前味として、共に仕え合つていきたいと願つている。

D. 自らの国と同胞を愛する

その中で、パウロがそうであつたように、またモーセがそうであつたように、ナシヨナリズムを越えた同胞への愛を持つべきである。

私が学んだ神学校はアメリカのサン・フランシスコの近くにあつた。家内と共に、ゴールドデン・ゲート・ブリッジが見える高台によく行つた。太平洋に沈む夕日を見ながら、思つていたのはその先にある、あの緑に溢れた小さな国のことである。なぜ日本は福音を受け入れないのか。日本のキリスト教の何が問題なのか。その思いを持つて神学校で学んだ。博士論文を書くために、生まれたばかりの小さな娘を連れて英国に渡つた。故郷、岡山の隣家の方が、日本の歌を聞くこともないだろうと、娘のために五本組のカセットテープを下さつた。「ぞうさん」「シャボン玉」、「お母さん」と

いった歌と並んで「ふるさと」が入っていた。

兎追ひし かの山 小鮒釣りし かの川 夢は今も めぐりて 忘れがたき 故郷
如何にいます 父母、恙なしや 友がき、雨に風に つけても、思ひ出づる 故郷
志を はたして、いつの日にか 帰らん、山は青き 故郷、水は清き 故郷⁽¹⁰⁾

故郷を後にした人で、また留学した人で、この歌が心に迫らない人はいないであろう。私も、志を果たし、この国において主に仕えるべく歯を食いしばって論文を書いた。

三度の出会いがありながら、この国はキリストを受け入れなかった。そして神を拒否してきたこの国が今、戦後、最も惨めな姿で傷んでいる姿を私たちは目の当たりにしている。この国において私たちはキリスト者として生きるように召されているのである。

私たちはこの地上の故郷への思いを持ちつつ、ヘブル書が、私たちの真の故郷は、天の御国であると語っていることを覚えなければならない。天の御国を仰ぎつつ、この国において主に仕えるのである。

これからも多くのセミナー、礼拝、シンポジウム、交わり会が、様々な団体によつて計画、実践されていくことになる。そういった場にお互いに出席し、また講演者、説教者として招き、招かれる関係が発展して欲しいと願っている。今、具体的に必要なのは、リーダーたちの顔が見える信頼関係である。直接会ってカフェでコーヒーを飲みながらいま何が必要なのかを分かち合う関係である。今どのような語りかけを神から受けているのか。どのようなヴィ

ジョンを受け取っているのか。どのような困難に直面しているのか。何を一緒にできるのか。こういったことを分かち合う関係である。この時を捉え、信頼に基づいた関係を意図的に作っていかねければならない。今日のこのシンポジウムの後で、協賛、後援くださった団体の代表者の方々と夕食を囲む会を用意しているのはそのような意図からである。

結論

皆さんは一〇〇年後の日本と教会にどのようになって欲しいと願われるだろうか。そしてそのために、もし仮に絶対に失敗しないとわかっているなら（失敗する恐れがなかったなら）、皆さんは神のために、自らの生が与えられているうちに何を試みたいと願われるだろうか。

私は、みなさんと一緒に上を見上げたいと思っている。ヴィジョンというカタカナがわかりにくいなら、志でいい。しかしそれは天の御国に向かったものでなければならぬ。神の御心に沿ったもの、天の御国に向かっている志は、神の民をひとつにする。そしてそのためになら、神の民は犠牲をいとわない。神の民はその内におられる聖霊の呼びかけに応答する。たとえそれが困難な道であっても、主の道に従っていきたいと思うのである。

そして神はそれを実現へと導かれる。「また、はつきり言っておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」（マタイ一八・一九―二〇）

私たちの世代に結果を見られなくてもいい。神の御名が崇められるなら。子どもたちや、未だ見ぬ孫たちや、曾孫たちの世代が実を刈り取ることができるのであれば、喜んで犠牲を捧げる。私たちは、今この時を捉え、御国を遙かに望

みつつ、その歩みをここから始めていかなければならない。

注

- (1) このセクシヨンのように小さいフォントで記されているのは、当日のシンポジウム配布資料には含まれていたが時間の都合で講演では読まなかつた部分である。
- (2) 司馬遼太郎『菜の花の沖3』（文藝春秋、文集文庫、二〇〇〇）、一九九頁。
- (3) 以下のいくつかの議論は拙著『キリスト教と日本との第四の出会い——大震災の中で仕える教会となるために』『牧会ジャーナル』二〇一一夏、五一号、一—七頁に記している。
- (4) リスボン地震（1755.11.1）では赤線地域が震災を逃れたことから、地震やそれに伴う破壊が必ずしも神の裁きの結果と容易にはいえないという理解が生まれてきた。Cf. Stewart Sutherland, “The Lisbon Earthquake: Two hundred and fifty years on,” a lecture delivered at Gresham College, London on 1 November 2005. サザラード卿の以下のコメントは興味深い。“But certainly then, some of the Protestants here were rather snug, and pointed out, very self-righteously, that amidst all the destruction and ruin of Roman Catholic churches in the earthquake, the English chapel in Lisbon was still standing, so there! However, it was immediately pointed out that the same was true of several brotherhs in the red light district of the city!” Alan David Francis, *Portugal, 1715–1808*, (London: Tamesis Books Ltd, 1985), 122 参照せよ。
- (5) Cf. H. Richard Niebuhr, *The Meaning of Revelation*, (New York: Macmillan Paperback edition; [New York: Macmillan], 1960 [1941]). 物語神学における神の民としての歴史理解はニーバーの「内なる歴史 (inner history)」と同質のものである。
- (6) この箇所の解釈については、私の解釈について友人の大坂太郎氏が有益なコメントを下さったことを感謝と共に記しておく。

きたい。

(7) マタイ福音書における「見る (ὁρακτιναι)」には注意深く詳細な情報に基づいて見極め、評価するという意味である。ルカ福音書における「見分ける (δοκιμαζειν)」には、試し、テストすることによってその真正さを見極めるというニュアンスがある。J.P. Louw & E.A. Nida, *Greek-English lexicon of the New Testament: Based on semantic domains*, (electronic ed. of the 2nd edition) (New York: United Bible Societies, 1996).

(8) H・リチャード・ニーバーはこの方向性を『啓示の意味』においては「内なる歴史」として、また『キリストと文化』においては「社会的実存主義」という形で提示した。これは創造的かつ適切なアプローチである。しかし私のニーバーへの批判は、その共同体性があまりにも抽象的に留まっているというところにある。

(9) H. Richard Niebuhr, *The Meaning of Revelation*, (New York: Macmillan Paperback edition; [New York: Macmillan], 1960 [1941]).

(10) 高野辰之(一八七六一一九四七) 作詞。